

富山県の東西における地域差

——富山市と高岡市のサーベイ調査から——

高山 龍太郎¹

キーワード：富山 高岡 呉東 呉西 地域意識 地域差

1 はじめに

富山県の地域性は、しばしば東西に分けて語られる。県中央部にある呉羽丘陵を境に、県東部を「呉東」（ごとう）、県西部を「呉西」（ごせい）とする呼び方は、そうした人びとの認識の一例である。たとえば、富山県を全国の人びとで紹介するある本は、富山県の市町村を呉東と呉西に分けて紹介している（須山 1997）。また、国民的作家と呼ばれた司馬遼太郎も、『週刊朝日』の連載「街道をゆく」のなかで、呉東と呉西という言葉にふれ、「人文的な分水嶺を県内にもつというのは、他の府県にはない」（司馬 1978：116）と紹介している。今回の私たちの調査でも、回答者の95%の人が、富山県が呉東と呉西という呼び名で二分されることを知っており、75%の人が、呉東と呉西の間に全般的な違いがあると考えていた。このように、富山県を東西に分けて把握する認識は、かなり一般的である。

しかし、こうした認識枠組みがある一方で、現実の富山県の東西の違いはなくなりつつある²。自動車を中心とする交通手段の発展は、富山県をますます

1 富山大学経済学部助教授, takayama@eco.u-toyama.ac.jp

2 「呉東、呉西の地域区分は、富山平野を二分している呉羽丘陵によるもので、従来よりおこなわれてきた慣習的な区分である。従来、両地域で商圏や方言・風習などに特徴がみられたが、最近では平野の中央部に人口が集中して交流が進み、さほど違いがみられなくなった」（須山 1997：8）

一体化させている³。本稿の目的は、こうした問題意識にもとづき、富山市と高岡市でのサーベイ調査から、富山県の東西の違いが、実際にどのくらい存在するのかを、実体と人びとの意識の両面から具体的に明らかにすることである。

調査の概要は、以下の通りである。富山県の東西をそれぞれ代表する都市として、富山市（東）と高岡市（西）を調査対象に選んだ。調査は、2005年12月から2006年1月にかけて、自記式郵送法による標本調査でおこなっている。実査の対象者は、富山市と高岡市から、500名ずつ合計1000名を選んだ。実査対象者の標本抽出には、選挙人名簿を台帳として二段抽出法によっておこなった⁴。回答者は446名（富山市213名、高岡市233名）で、回収率は全体で44.6%（富山市42.6%、高岡市46.6%）であった。

2 調査対象地の概要

2-1 富山県

富山県は、本州日本海側の中央北部に位置する。富山へは、鉄道で、東京、大阪、名古屋のいずれからも3時間あまりかかる。県の東側は、標高3000mを超える立山連峰がそびえ、新潟県と長野県と接している。南西側も山岳地帯で区切られており、南は岐阜県、西は石川県と隣接している。北側は富山湾である。

3 『富山高岡広域都市圏第3回パーソントリップ調査』を参照（富山高岡広域都市圏総合都市交通体系調査会 2002）。富山県の東西は、90kmほどであり、北陸自動車道を自動車で行けば、およそ1時間で走り抜けてしまう。また、富山県の自動車普及率は高く、2004年3月末現在、自家用乗用車の1世帯あたりの台数は、1.72台で全国2位である。

4 調査母集団は、富山市（合併前）と高岡市（合併後）に居住する20歳から80歳の有権者である。回答が困難だと思われる明治・大正生まれの人を除いた。富山市の標本抽出では、2005年4月1日の市町村合併前の旧富山市（新富山市から旧大沢野町、旧細入村、旧婦中町、旧八尾町、旧山田村、旧大山町を除く合計24万1296名）を母集団とし、高岡市では、2005年11月1日の合併後の新高岡市（旧高岡市と旧福岡町と合わせた合計15万1398名）を母集団とした。どちらも投票区を調査地点の第一次抽出単位とし、それぞれ20の調査地点を系統抽出法によって抽出した。次に、各調査地点から系統抽出法によってそれぞれ25名ずつ抽出した。

東南西の山々から流れ出す急流河川が、扇状地と沖積平野を作りだし、富山平野は、水田を中心とする農業地帯となっている。面積は、4247km²（都道府県別で全国33位、東西約90km×南北約76km）、人口は、2005年10月1日現在、111万1602人（全国38位）で、比較的にこじんまりした県である。冬期には、雪が積もるが、気温はそれほど下がらず、氷点下になる日は多くない。県庁が所在するのは、富山市である。2014年度の開業を目指して、北陸新幹線（長野―富山―石川）の建設が進んでいる。

第一次産業は、水田率⁵が95%を超える稲作や全国的に有名なチューリップ球根の生産のほか、富山湾での漁業が盛んである。富山湾のブリやホタルイカは、全国的に知られている。第二次産業は、豊富な工業用水と安価な電力供給のもとで、金属製品、化学工業、電子部品、一般機械、非鉄金属などが発達し、日本海側屈指の産業集積を形成する。その反面、卸売・小売業やサービス業の占める割合は小さく、第三次産業の構成比は全国平均を下回る。

富山県の県民性は、「勤勉・真面目・几帳面で、辛抱強く進取に富む」（須山1997：96）と言われる。富山県の家族の典型的なイメージは、大きな家を所有して家族3世代が同居しながら、共稼率の高さが物語るように女性も含めて家族がみんなで働いて、家計を豊かにし、貯蓄に励むというものである。共稼率の高さは、富山県で工業化が早くから進んだこととも無縁ではない。進取の気性は、「富山の葉売り」として全国各地を渡り歩いた配置業に象徴される。また、富山県は、福井県や石川県などとともに浄土真宗の信仰の厚い地である。

2-2 富山市

県東部を代表する富山市は、2005年4月1日に、旧富山市と、大山町、大沢野町、婦中町、八尾町、細入村、山田村の1市4町2村が合併して、新しい

5 水田率＝田面積÷（田＋畑面積）×100

富山市となった。今回の調査は、旧富山市を対象としている。県庁が所在する富山市は、地理的に富山県のほぼ中央に位置し、県内各地から自動車ではほぼ1時間以内に到達できる。このため、さまざまな企業や放送局などが集積する。新富山市の人口は、41万8583人（2006年8月末日現在）、旧富山市の人口は、32万2192人（2004年9月30日現在）であった。富山県全体の人口は減少しているが、富山市は増加傾向にある。

江戸時代は、10万石の富山藩に属し、二代藩主の前田正甫は、売薬業を奨励した。明治以降、売薬業者は、金融業を手始めに、電源開発、鉄道、繊維、水産などの幅広い分野に投資し、富山県の産業の育成に貢献した。1945年の富山大空襲で、市街のほぼ全域が焼失したが、道路建設と区画整理事業を平行して進めたおかげで、富山市の戦災復興は全国的にも早かったと言われる。朝鮮戦争を契機に本格的に工業が復興し、戦前からの機械工業に加えて、石油化学工業が発展する。石油危機を経て、重厚長大型産業から、付加価値を高めた薬品工業や電子部品工業、産業用ロボットなどが盛んになった。

2-3 高岡市

県西部を代表する高岡市は、2005年11月に、旧高岡市と福岡町が合併し、新しい高岡市となった。今回の調査は、新高岡市が対象である。新高岡市の人口は、18万2058人（2006年8月末日現在）で県内第2位の人口規模だが、新富山市の半分に満たない。2004年10月から2005年9月の1年間で、富山県内の市町村でもっとも人口の減った自治体でもある。高岡駅前も、富山駅に比べ活気がない。

しかし、現在の高岡市伏木に越中の国府と国分寺がおかれたように、高岡市は、富山市よりも歴史が古く、また、にぎわっていた。江戸時代は、100万石の加賀藩に属し、三代藩主前田利常は、税免除などによって商工業の奨励を積極的におこなった。明治末には、「北陸の大阪」と呼ばれるほど商業がさかんになり、銅器などの伝統工芸も発達した。現在では、主力のアルミ製品のほか、化学製

品、紙・パルプ製品の生産が大きい。戦災を受けなかった高岡市には、歴史と伝統を感じさせる街並みが残っており、国宝の瑞龍寺がある。旧加賀藩の影響で、謡曲・茶道・華道・俳句・書道などの活動が盛んであり、文化都市の趣がある。

2-4 富山県の地域区分

2-4-1 2区分

富山県の地域区分では、先述の通り、東と西に分けることが多い。そうした認識を表す象徴的な言葉が「呉東」と「呉西」である。呉東と呉西を分ける呉羽丘陵は、富山県のほぼ中央に位置し、南北に長さ約8 km、幅最大2 kmにわたって広がる。最高峰の城山は、標高145mで、さほど高くはないが、大きな起伏の少ない沖積平野の富山平野では目立つ存在である。南東斜面は急峻であるが、北西斜面はなだらかで、特産品のナシ畑が広がる。呉東には、富山市・滑川市・魚津市・黒部市・上市町・立山町・入善町・朝日町・舟橋村の4市4町1村が区分けされ、呉西には、高岡市・射水市・氷見市・砺波市・南砺市・小矢部市の6市が区分けされる。

呉東と呉西という言葉の起源は、比較的新しく、地理学者が昭和の初めごろに使いはじめた（広瀬 1976；須山 1994）。富山県の地形は、呉羽丘陵の東側では、3000m級の立山連峰がそびえ、傾斜が急で荒々しい景観であるのに対し、西側では、緩傾斜でやわらかい景観となる。こうした自然的区分が、人文上のさまざまな相違と一致することから、呉東と呉西という用語が一般に定着したと見られる。よく言われる人文上の相違には、たとえば、言葉では、「呉西は関西言葉に通じるものがあるが、呉東は東北言葉の影響が見られる」、食生活では、「呉東では豚肉が好まれるが、呉西では牛肉が好まれる」、就職では、「呉東では関東を目指す、呉西では関西を目指す」などがある。

呉東と呉西のように、富山県を東西で2つに分ける認識は、組織運営などに反映されることもある。たとえば、文化行事を呉東と呉西で交互に開催したり、

全県的な組織を呉東部会・呉西部会に分けて運営したり、役員を呉東と呉西から同数選出したりするという（広瀬 1976）。こうした東西を平等にあつかう慣行は、1889年の市制・町村制施行で富山県内にできた市が、それぞれ東西を代表する富山市と高岡市の2つだったこととも無縁ではなかろう。こうした認識は、ときに、対抗意識として顕在化する。たとえば、それは、富山大学経済学部の設置場所や新産都市の指定などをめぐってあらわれた（須山 1994）。

公的な文脈では、呉羽丘陵で区切る呉東と呉西よりも、市町村界で区切る県東部と県西部という呼び方のほうが一般的である。これは、富山市の一部が、呉羽丘陵の西にも広がるために、呉東呉西の区分と行政上の区分が一致しないためである。気象庁の天気予報は、長らく「県東部」と「県西部」という区分だったが、2002年3月から「東部北」「東部南」「西部婦負」「西部北」「西部南」の5つに細分された。しかし、市町村合併により、「西部婦負」にあたる旧婦負郡の町村が富山市となったため、2006年3月から、「西部婦負」は、富山市を含む「東部南」へ変更された。つまり、旧婦負郡の天気予報区は、市町村合併によって、西部から東部へ変わった。富山県の行政組織を見ると、教育事務所（東部教育事務所、西部教育事務所）や児童相談所（富山児童相談所、高岡児童相談所）が、富山県の東西に1つずつ設置されている。

2005年10月1日現在の人口を見ると、富山県111万4692人のうち、県東部64万1612人（57.6%）、県西部47万3080人（42.4%）となり、県東部のほうが、人口が多い。

2-4-2 3区分

富山県の衆議院小選挙区は、3つの選挙区からなる。「第1区」は、2005年4月の市町村合併前の旧富山市である。「第2区」は、県東部の市町村から旧富山市を除いた地域である。「第3区」は、県西部の地域とそのまま重なる。2006年9月時点での有権者数は、富山県全体で91万3362人であり、第1区26万3157人（28.8%）、第2区25万9370人（28.4%）、第3区39万0835人（42.8%）である。第1区と第2

区選出の衆議院議員は自民党，第3区選出議員は国民新党である。

2-4-3 4区分

8世紀初頭に制定された大宝律令の国郡里制のもと，8世紀中頃に，現在の富山県の県域に等しい越中国が成立し，「射水郡」「砺波郡」「婦負郡」「新川郡」の4つの郡（越中四郡）がおかれた。この体制は，明治の初めまで続く。越中四郡の区域は，おおよそ，神通川の東側が新川郡，神通川から呉羽丘陵までが婦負郡，呉羽丘陵より西が射水郡，射水郡の南が砺波郡となる。

また，富山県を，「富山地区」（富山市・滑川市・上市町・立山町・舟橋村），「新川地区」（魚津市・黒部市・朝日町・入善町），「高岡地区」（高岡市・射水市・氷見市），「砺波地区」（砺波市・小矢部市・南砺市）と4つに分けるやり方もある。この区分は，越中四郡の区分とは重ならない部分が多い。また，滑川市・上市町・立山町・舟橋村は，新川地区に分類されたり，富山地区に分類されたり，さまざまである。これらの1市2町1村は，富山市とゴミ処理や消防などを協同でおこなう広域圏を形成し，富山市と行政的な結びつきが強い。しかし，これらの市町村を富山地区に加えると，他の地区にくらべ富山地区の人口が突出してしまう⁶。そのため，県立高校入試⁷やスポーツ大会など各地区の人口の均衡が重要な場合は，この1市2町1村を新川地区へ組み入れることが多いようである。高岡地区と砺波地区は，おおむねこの区分が一般的だが，行政的な結びつきから小矢部市が高岡地区に区分されることもある。

富山県の行政組織をみると，4つに区分することが多い。たとえば，農地・

6 2005年10月1日現在の人口でみると，滑川市・上市町・立山町・舟橋村を富山地区に入れた場合，富山地区の人口は，51万0186人となり，富山県全体の45.8%になる。それに対して，上記の1市2町1村を富山地区から除いた場合の富山地区の人口は，42万2417人（37.9%）である。

7 富山県の学区は，以下の4つである。「新川学区」（魚津市・滑川市・黒部市・入善町・朝日町・上市町・立山町・舟橋村），「富山学区」（富山市），「高岡学区」（高岡市・氷見市・射水市），「砺波学区」（砺波市・小矢部市・南砺市）。富山県立の全日制課程普通科高校では，高校の所在する学区に隣接する学区（富山学区と砺波学区は隣接するが，通学は認められていない）までが通学区域となっており，通学区域外からの通学は認められていない。全日制普通科以外の県立高校は，富山県下一円が通学区域である。

農業用水・農道や森林の整備などをおこなう農地林務事務所⁸、道路・河川・公園・下水道・砂防施設などの整備や維持管理をおこなう土木センター⁹などがそうである。また、先述のとおり、富山県の現在の天気予報区¹⁰は4つである。医療法に定められた医療計画を立てる際に主に整備すべき病院の病床数を算定する基準となる二次医療圏¹¹も、富山県では、4つが設定されている。

2-4-4 5区分

ゴミ処理・消防・福祉などの行政サービスを協同でおこなう広域市町村圏¹²（広域圏）は、富山県には、これまで、「射水広域圏」（射水市）、「高岡広域圏」（高岡市・氷見市・小矢部市）、「砺波広域圏」（砺波市・南砺市）、「新川広域圏」（魚津市・黒部市・入善町・朝日町）、「富山広域圏」（富山市・舟橋村・上市町・立山町・滑川市）の5つが存在した。しかし、2005年11月に市町村合併によって射水市が誕生し、射水広域圏の区域が射水市となったことから、射水地区広域圏事務組合が解散されたので、現在の富山県に存在する広域圏は、4つである。ただし、射水地区広域圏事務組合の業務は、そのまま射水市に引き継がれたので、現在も、従来の5つの広域行政区域の枠組みが残っていると云える。

8 「富山農地林務事務所」（富山市・舟橋村・上市町・立山町）、「魚津農地林務事務所」（滑川市・魚津市・黒部市・入善町・朝日町）、「高岡農地林務事務所」（高岡市・氷見市・小矢部市・射水市）、「砺波農地林務事務所」（砺波市・南砺市）

9 「新川土木センター」（魚津市・滑川市・上市町の一部・黒部市・入善町・朝日町）、「富山土木センター」（富山市・上市町の一部・立山町・舟橋村）、「高岡土木センター」（高岡市・射水市・氷見市・小矢部市）、「砺波土木センター」（砺波市・南砺市）

10 「東部北」（滑川市・魚津市・黒部市・入善町・朝日町）、「東部南」（富山市・上市町・立山町・舟橋村）、「西部北」（高岡市・射水市・氷見市・小矢部市）、「西部南」（砺波市・南砺市）

11 「新川医療圏」（魚津市・黒部市・朝日町・入善町）、「富山医療圏」（富山市・滑川市・上市町・立山町・舟橋村）、「高岡医療圏」（高岡市・射水市・氷見市）、「砺波医療圏」（砺波市・小矢部市・南砺市）

12 広域市町村圏（広域圏）とは、住民の生活圏が既存の市町村の区域を超え広域化し、行政サービスの専門化と高度化が求められている社会状況に対応するため、地方自治法の規定にもとづいて、近隣の市町村が、協同で行政サービスをおこなう仕組みである。富山県の広域圏の種類は、地方自治法284条による一部事務組合の方式であり、砺波広域圏事務組合、新川広域圏事務組合、富山地区広域圏事務組合、高岡地区広域圏事務組合の4つの広域行政機構が置かれている。

富山県内の保健所をみると、「富山市保健所」（富山市）、「新川厚生センター」¹³（黒部市・魚津市・入善町・朝日町）、「高岡厚生センター」（高岡市・氷見市・射水市）、「中部厚生センター」（滑川市・上市町・立山町・舟橋村）、「砺波厚生センター」（南砺市・砺波市・小矢部市）という5つが設置されている。

2-4-5 小括

富山県の地域区分は、同じ数に区分する場合でも、境界線の引き方が微妙に異なることも多く、確定した地域区分の仕方はない状況である。それは、いわゆる平成の大合併と呼ばれた一連の市町村合併の流れで、各自治体が合併の枠組みをめぐるもめたことにも表れている。しかし、呉羽丘陵という境界線は、いくつに分ける場合でもほぼ共通しており、普遍性がある。

この節では、主に、行政制度における地域区分を取りあげたが、より正確には、通勤・通学圏や商圈などの実際的な地域のつながりや、人びとの意識上の地域区分も検討すべきであろう。富山県の地域区分は、たいへん大きなテーマになるので、今後の課題としたい。

3 回答者の概要

ここから、調査結果¹⁴を見ていく。最初に、標本となった回答者の属性を母集団と比較する。今回の標本抽出は、20歳から80歳までの有権者を調査母集

13 厚生センターとは、保健と福祉の連携を進めるために、2002年7月1日に施行された「富山県厚生センター条例」によって設置されたもの。地域保健法が規定する保健所であり、新川厚生センターと中部厚生センターにおいては、社会福祉法が規定する社会福祉事務所でもある。中核市である富山市は、独自に保健所を設置している。このような改組によって、保健所と福祉事務所が、同一の二次医療圏や高齢者保健福祉圏域、障害者保健福祉圏域に設置されることで、各厚生センターによって圏域ごとの連絡調整会議や研修などが容易になり、市町村や各地域の関係機関との連絡調整もスムーズになったと言われる。

14 調査にもちいた質問紙、および、調査結果の単純集計は、以下のURLを参照していただきたい。http://www3.u-toyama.ac.jp/takayama/study/goto_gosei/index.htm

団として、選挙人名簿をもちいた二段抽出でおこなった。回収率は44.6%で、郵送法としてはまずまずの数字であるものの、高い回収率とは言えない。このため、標本の偏りについて確認しておく必要がある。

3-1 年齢と性別

問23で「年齢」をたずねた。図1のグラフでは、10歳ごとの年齢層の構成比を計算し、母集団を縦棒グラフで、標本を折れ線グラフで示した。参考までに、富山県全体の数値も表示した。母集団の特徴を見ると、富山市¹⁵の20代と30代の構成比が、富山県全体や高岡市よりも高く、富山市は、全体に人口構成が若い。高岡市は、60代の構成比がやや大きいものの、ほぼ富山県全体の構成比とかわらない。次に、標本を見ると、富山市と高岡市のいずれも、20代と30代の回答者の構成比が低い。両市をくらべると、総じて、高岡市の回答者のほうが、年齢の高い人の構成比が高くなっている。標本の平均年齢は、富山市51.6歳、高岡市54.5歳となり、富山市のほうが若い。

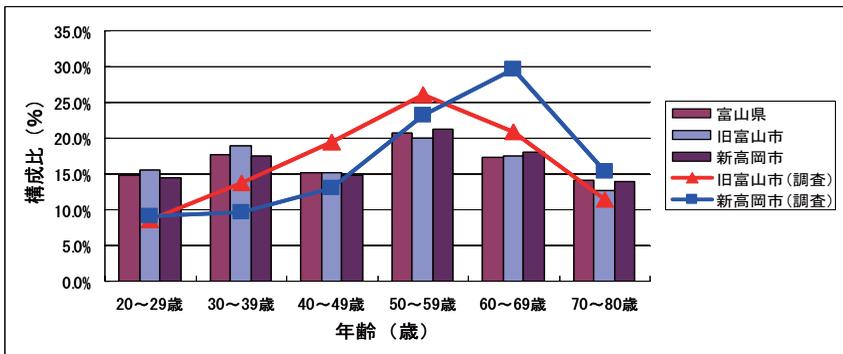


図1 富山市と高岡市の年齢別人口構成比（母集団と標本の比較）

15 以下、特にことわりがないかぎり、富山市は「旧富山市」、高岡市は「新高岡市」を指す。

表1では、母集団と標本の男女・年齢別人口構成比を示した。男女別では、全体としてみると、母集団と標本の差は小さい。しかし、年齢別で標本の男女比を見ると、富山市は、各年齢層で男女比がほぼ同じだが、高岡市は、大きな偏りがある。高岡市では、60代男性の回答者がきわだって多いのに対して、20代・30代・40代の男性回答者は少ない。この分布は、カイ二乗検定の結果、統計的に有意な差があった¹⁶。

3-2 家族構成

問27で「現在、配偶者がいる」と答えた人は、富山市77.7%、高岡市77.4%で、両市の間には差はない。2005年の国勢調査によると、20から79歳までの有配偶率は、全国66.0%、富山県70.4%、富山市67.7%、旧高岡市¹⁷70.0%で、いずれも標本のほうが高い。標本と国勢調査について年齢別に有配偶率を比較すると、富山市の回答者は70代を除いて、国勢調査に近い値を示している。高岡市の回答者は、20代は国勢調査よりかなり値が低いのに対し、30代は逆にかなり高くなっている。それ以外の年代は、ほぼ国勢調査に近い有配偶率を示している。

問28で「未成年（20歳未満）の子どもと同居している」と答えた人は、富山市33.7%、高岡市34.1%で、両市に差はない。いずれの市でも、「子どもと同居している」と回答した人は、30代・40代に多い。ただし、30代のみを比較すると、富山市よりも高岡市のほうが、「配偶者がいる」「子どもと同居している」と答えた回答者が多かった。

16 高岡市 $\chi^2=19.081$, $df=5$, $p<.005$

17 資料の都合上、合併前の旧高岡市の数値をもちいた。

表 1 富山市と高岡市の性別・年齢別人口構成比および有配偶率（母集団と標本の比較）

			20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～80歳	合計
母集団	富山県	男	15.8%	18.5%	15.5%	21.0%	16.8%	12.4%	411560人
		女	14.0%	16.9%	14.9%	20.5%	17.9%	15.8%	430119人
	富山市	男	16.6%	19.8%	15.5%	20.0%	16.9%	11.2%	119496人
		女	14.7%	18.2%	14.9%	20.1%	18.0%	14.2%	124844人
		有配偶率	26.3%	70.5%	82.6%	83.9%	80.4%	63.4%	167974人
	高岡市	男	15.1%	18.5%	15.0%	21.4%	17.6%	12.4%	67829人
		女	13.8%	16.5%	14.6%	21.0%	18.5%	15.6%	71359人
		有配偶率	28.1%	71.6%	84.1%	85.2%	80.7%	64.4%	91866人
	標本	富山市	男	7.9%	16.8%	18.8%	24.8%	19.8%	11.9%
女			9.2%	11.0%	20.2%	26.6%	22.0%	11.0%	109人
有配偶率			22.2%	65.5%	90.2%	85.5%	84.1%	83.3%	164人
高岡市		男	5.9%	6.9%	5.9%	25.5%	40.2%	15.7%	102人
		女	12.1%	12.1%	19.4%	21.0%	21.0%	14.5%	124人
		有配偶率	9.5%	90.9%	83.3%	88.7%	86.8%	70.6%	177人

3-3 学歴

問25の「最終学歴」をみると、富山市の回答者が高岡市よりも学歴が高いという有意差が見られた¹⁸。富山市では、30.6%の人が「大学・大学院」を卒業したと回答したが、高岡市では、18.5%にとどまった。また、「中学校」（旧制の小学校高等科を含む）と回答した人は、富山市11.7%に対して、高岡市は2倍弱の22.0%であった。表2のとおり、母集団でも、富山市のほうが高岡市よりもやや学歴が高い。初等教育、中等教育、高等教育にわけたとき、高岡市の回答者は、母集団に近い分布をしたが、富山市の回答者は、初等教育の割合

18 カイ二乗検定は、「大学院」の回答数が少なかったため、「大学」「大学院」を「大学・大学院」にまとめておこなっている。 $\chi^2=26.521$, $df=4$, $p<.0005$

が低く、高等教育¹⁹の割合が高いという偏りが生じている。

3-4 職業

問26では「主な仕事」をたずねた。回答選択肢は「自営業」「民間企業に勤務」「官公庁に勤務」「主婦（主夫）」「学生」「無職」「その他」と、比較のおおまかな分類でたずねた。結果は、両市の間に違いはほとんど見られなかった。表2は、「自営業」と「その他」を「自営業主」、「民間企業に勤務」と「官公庁に勤務」を「雇用者」、「主婦（主夫）」と「学生」と「無職」を「無業者」に再コードし、2000年の国勢調査²⁰と比較したものである。国勢調査においても、両市の間にほとんど差がない。母集団よりも、自営業主に分類される回答者の割合が高いが、母集団と標本の間には、さほど差はない。

表2 富山市と高岡市の学歴別・職業別人口構成比（母集団と標本の比較）

		初等教育	中等教育	高等教育	合計	雇用者	自営業主	無業者	合計
母 集 団	富山県	29.4%	46.8%	23.8%	890986人	52.1%	10.1%	37.8%	960559人
	富山市	22.7%	48.8%	28.6%	254666人	52.2%	8.8%	38.9%	278458人
	高岡市	27.9%	47.8%	24.3%	149173人	51.1%	10.7%	38.1%	159628人
標 本	富山市	11.7%	47.6%	40.8%	206人	49.8%	14.7%	35.5%	211人
	高岡市	22.0%	53.3%	24.7%	227人	48.5%	16.3%	35.2%	227人

19 「小学校・中学校」卒業者を「初等教育」修了者、「高校・旧中」卒業者を「中等教育」修了者、「短大・高専」及び「大学・大学院」卒業者をまとめて「高等教育」修了者に分類する総務省統計局にしたがって、再コードした。

20 国勢調査の結果は15歳以上の人びとについてのものである。調査母集団は、20歳から79歳なので、完全には一致しない。国勢調査の結果は、「雇用者」と「役員」をまとめて「雇用者」、「雇い人のある業主」「雇い人のない業主」及び「家庭内職者」「家族従業者」をまとめて「自営業主」、「完全失業者」「非労働力人口」をまとめて「無業者」に分類している。

3-5 居住期間

問1では「別の市町村に住んだ経験の有無」をたずね、問2では「現在住んでいる市の居住期間」をたずねた。表3は、2000年の国勢調査と比較したものである。国勢調査は全人口を対象としているが、今回の調査母集団は、20歳から79歳の有権者であるので、完全には一致しない。国勢調査でも、出生時から住んでいる人の割合は、富山市よりも高岡市のほうが高い。標本においても、富山市よりも高岡市のほうが高い。しかし、その構成比率は、富山市38.7%、高岡市46.4%と、両市とも国勢調査の2倍以上になっている。今回の調査対象者は、20歳以上の人なので、出生時から住んでいると答えた人は、20年以上住んでいる人である。したがって、今回の調査で回答に応じてくれた8割弱の人びとが、現在住んでいる市に20年以上住んでいるということである。特に、生まれてからずっと同じ市に住み続けている人が、調査に応じてくれたものと考えられる。

表3 富山市と高岡市の居住期間別人口構成比（母集団と標本の比較）

		出生時から	1年未満	1年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上	合計
母 集 団	富山県	24.5%	5.9%	14.2%	9.7%	13.4%	32.3%	1117809人
	富山市	16.7%	7.9%	18.4%	11.2%	15.8%	29.9%	323584人
	高岡市	22.4%	5.6%	14.1%	9.9%	14.5%	33.5%	185036人
標 本	富山市	38.7%	0.9%	7.5%	4.7%	8.5%	39.6%	212人
	高岡市	46.4%	2.1%	3.9%	4.3%	10.3%	33.0%	233人

3-6 選挙投票

問30で「2005年9月11日実施の衆議院議員選挙の投票」についてたずねた。この選挙は、小泉純一郎前首相の郵政民営化をめぐる刺客候補などの話題も多く、小選挙区の投票率は全国平均で67.51%となり、前回2003年の

衆院選の59.86%を大きく上回った。高岡市を含む小選挙区の富山3区では、衆議院議長も務めた綿貫民輔氏の自民党離党もあり、選挙への関心が高く、投票率は75.52%にもなった。旧富山市がそのまま選挙区になる富山1区の投票率は65.84%で、3区におよばない²¹。問30で、「投票した」と回答したのは、富山市84.9%、高岡市90.4%だった。両市の間に統計的に有意な差はない。実際の投票率とくらべると、標本での投票率はかなり高く、標本における両市の投票率の差も小さい。今回の調査に回答してくれた人びとは、地域の政治や公的なことがらへの関心が高い人、あるいは、必ず選挙の投票にいく律儀な人ということになるろう。

3-7 小括

以上から、標本の偏りとして注意すべき点は、(1)全体として20代・30代の若い世代の回答者が少ないこと、(2)高岡市では60代男性が多く回答していること、(3)富山市では高等教育修了者が多く回答していること、(4)出生時から現在の市に住み続けている人が多く回答していること、(5)選挙の投票に必ず行くような人が多く回答していること、などである。これらに留意しながら、調査結果を読む必要がある。

4 回答者の居住地域とのかかわり

既にみたように、回答者の8割近くは、現在住んでいる地域に20年以上暮らしている(問2)。これは、回答者と居住地域との深いつながりを予測させる。ここでは、回答者と居住地域との関係、および、居住地域外との関係についてみていく。

21 富山2区の投票率は69.99%、富山県全体では71.16%であった。

4-1 居住地域への愛着・参加規範・参加頻度

結論を先に述べると、居住地域への回答者のかかわりはたいへん強い。問4で、現在住んでいる地域に「愛着を感じている」と答えた人は、富山市40.3%、高岡市44.2%、「どちらかというとな愛着を感じている」と答えた人は、富山市39.8%、高岡市40.3%であり、いずれの市でも、8割以上の人が、自分の居住地域に愛着を抱いている。この愛着の程度には、両市の間に統計的に有意な差はない。また、いずれの市でも、居住地域への愛着と性別の間には関連がなかった。年齢については、富山市のみ、年齢が高いほど愛着が強くなるという関連がみられた²²。また、両市において、居住期間が長くなるほど居住地域への愛着が強くなる関連がみられた²³。同様に、いずれの市でも、生まれてからずっと現在の居住地域に住んでいる人ほど、居住地域への愛着は強くなる²⁴。居住地域に愛着を抱くには、その地域ですぐ「時間」がたいへん重要な要素になっている。

この居住地域への愛着の強さは、問5で質問した「地域社会へのかかわり方の規範意識」にも関係する。問5では、「たまたまその土地に生活しているだけだから、地域社会のためにそれほど積極的に協力する必要はない」というAの意見と、「地域社会は自分の生活上のよりどころであるから、少々負担になっても、お互いに協力し、住みやすくなるよう心がけたい」というBの意見について、どちらに賛成かをたずねた。結果は、「Bに賛成」と答えた人は、富山市39.8%、高岡市44.6%、「どちらかといえばBに賛成」と答えた人は、富山市

22 年齢を20歳ごとに3区分し、愛着を「愛着あり群」と「愛着なし群」に2区分して、カイ二乗検定をおこなうと、富山市では、年齢が高いほど愛着も強くなるという関連がみられた($\chi^2 = 7.136, df=2, p<.05$)が、高岡市では関連はなかった。

23 居住期間を「30年未満」と「30年以上」に2区分し、愛着を「愛着あり群」と「愛着なし群」に2区分して、カイ二乗検定をおこなうと、両市において関連がみられた(富山市 $\chi^2 = 8.620, df=1, p<.005$ 、高岡市 $\chi^2 = 11.905, df=1, p<.005$)。

24 居住地域への愛着を「愛着あり群」と「愛着なし群」に2区分して、カイ二乗検定をおこなうと、両市において関連がみられた(富山市 $\chi^2 = 8.665, df=1, p<.005$ 、高岡市 $\chi^2 = 9.970, df=1, p<.005$)。

44.2%、高岡市43.3%である。両市の間統計的に有意な差はない。いずれの市でも、8割以上の人びとが、自分たちの力で地域社会を住みやすくすべきと考えている。表4で明らかなおと、居住地域に愛着をもっていることと、地域社会へ積極的に関わるべきであるという規範意識は、強い関連がある。

問3では、町内会・自治会・PTA・老人会・婦人会・子ども会などの「地域活動への参加頻度」をたずねている。全体としてみると、富山市民よりも、高岡市民のほうが、地域活動への参加頻度が高い。これは、統計的に有意な差である²⁵。

しかし、実際の地域活動への参加頻度は、地域社会へかかわるべきという規範意識と直接には結びつかない。20代・30代でBの意見に「賛成」「どちらかといえば賛成」と答えた人たちの地域活動への参加頻度を調べると、上の条件に該当する富山市34人、高岡市33人のうち、参加が「なし」と答えた人は、富山市22人(64.7%)、高岡市16人(48.5%)だった。20代・30代は、仕事も家庭も忙しい時期なので、参加の思いはあっても、地域活動に実際に参加するのは難しいのかもしれない。居住地域への愛着と地域活動への参加頻度の関係についても、同様の傾向があてはまる。20代・30代の人びとは、居住地域に愛着をもっている、地域活動への実際の参加は盛んではない。

表4 現在の居住地域別の「居住地域への愛着」と「地域社会への意識」

		Aの意見に賛成	Bの意見に賛成	回答者計
富山市	愛着を感じている	6.7%	93.3%	163人
	愛着を感じていない	38.2%	61.8%	34人
	小計	12.2%	87.8%	197人
高岡市	愛着を感じている	4.8%	95.2%	186人
	愛着を感じていない	31.0%	69.0%	29人
	小計	8.4%	91.6%	215人

25 $\chi^2 = 10.027, df=4, p < .05$

4-2 居住地域の外とのかかわり

問6で「日中に主にすごす地域」をたずねた。当然の結果だが、富山市では富山広域圏（209人中199人、95.2%）、高岡市では高岡広域圏（230人中197人、85.7%）で日中すごす人が圧倒的に多かった。日常的に富山県の東西を行き来する生活を送る人はごくまれである。高岡市では、射水広域圏ですごす人7.0%、富山広域圏ですごす人4.8%が含まれ、富山市民よりも、日中すごす地域は分散している。また、「今までに一番長く住んでいた場所」をたずねた問7でも、問6と同様の傾向が表れ、富山市では富山広域圏と答える人（211人中188人、89.1%）、高岡市では高岡広域圏と答える人（230人中196人、85.2%）が圧倒的に多かった。以上の結果から、日常的には、富山市民も高岡市民も、比較的狭い範囲で生活していると言える。

問8では「富山県外に住んだ期間」、問9では「富山県外に出かける頻度」をたずねた。富山県外に住んだ期間では、両市の間に差はない。県外の居住経験のない人は、富山市43.5%、高岡市50.2%ほどいたが、県外に10年以上居住した経験のある人も、富山市17.7%、高岡市16.2%いる。県外に出かける頻度も、両市の間に差は見られない（問9）。8割ほどの人が、最低でも1年に1～2回は県外にいき、そのなかには、月1回以上県外へ出かける人も、富山市16.6%、高岡市11.4%ほど含まれる。日常的には、自分の居住地域を中心に比較的狭い範囲で生活しているものの、数ヶ月に1回くらいは、県外へ遠出するようすが見える。

問11-2で「呉東と呉西に住む親しい友人の数」をたずねた。富山市民で、呉西の友人が0人と答えた人は、182人中47人(25.8%)であった。高岡市民で、呉東の友人が0人と答えた人は、201人中58人(28.9%)だった。つまり、富山県を呉東と呉西に2分した場合、反対の地域に親しい友人をもたない人は、両市とも4分の1程度いる（表5）。

しかし、呉東と呉西それぞれの友人の数のパターンをみていくと、富山市の

回答者でもっとも多いのは、「呉東1～5人，呉西1～5人」（38人20.9%，1位）という呉東と呉西が同数のパターンだった。「呉東1～5人，呉西1～5人」のパターンは，高岡市でも，3番目に多かった（20人10.0%，3位）。以下，富山市で多かったのは，順に，「呉東6～10人，呉西1～5人」（24人13.2%，2位），「呉東1～5人，呉西0人」（23人12.6%，3位）だった。一方，高岡市で一番多かったのは，「呉西6～10人，呉東1～5人」（36人17.9%，1位），「呉西1～5人，呉東0人」（33人16.4%，2位）だった。このように，東西の区別なく親しい友人をもつ人も少なくない。両市民ともに，狭い地理的範囲で友人とのつきあいが閉じているとは必ずしも言えない。

居住地域外とのかかわりは，人との直接的なつきあいだけにかぎらない。メディアなどをとおした間接的なコミュニケーションも含まれる。問12では「富山に関するテレビニュースの視聴頻度」をたずねている。「毎日見る」と答えた人は，富山市71.6%，高岡市64.6%，全体で68.0%，「週に4～5日見る」と答えた人は，富山市11.9%，高岡市15.3%，全体で13.6%おり，日常的に富山県のニュースに接していることがわかる。この視聴頻度について，両市の間に統計的に有意な差はなかった。

メディアとのかかわりでは，問29で「普段読んでいる主な新聞」についてたずねた。富山市と高岡市には違いが見られる。富山市では，富山市に本社を置く「北日本新聞」が大きなシェア（66.0%）を占める²⁶。これに対し，高岡市では，北日本新聞の購読者が減り（48.7%），その分，高岡市に北陸支社のある「読売新聞」（富山市17.0%，高岡市24.1%）や，石川県金沢市に本社を置く北國新聞の系列である「富山新聞」（富山市1.5%，高岡市11.6%）の購読者が増える。

以上をまとめると，回答者は，(1)日常的には自分の居住地域の近辺ですごしているが，(2)数ヶ月に1回は県外にも遠出をしており，(3)親しい友人も，

26 北日本新聞の発行部数は，朝刊24万4688部(平成17年12月)，県内普及率は67%（富山市71%）である（北日本新聞社 2005）。今回の調査では，複数の新聞を購読している人は，「複数の新聞」と分類したので，北日本新聞の数値はもう少し上がるだろう。

自分の居住地域だけにかぎられるわけではなく、地理的に幅広い交友をしている人もおり、(4)テレビニュースなどをおして富山県全体のことを見聞きする、となる。

表5 現在の居住地域別の「親しい友人の数(呉東)」と「親しい友人の数(呉西)」

現在の居住地域			親しい友人の数(呉西)						回答者計
			0人	1～5人	6人～10人	11人～15人	16人～20人	21人以上	
富山市	親しい友人の数(呉東)	0人	1.6%	.0%	.5%	.0%	.0%	.0%	4人
		1～5人	2.6%	20.9%	1.1%	.5%	.0%	.0%	64人
		6人～10人	8.2%	13.2%	1.6%	.5%	.0%	.0%	43人
		11人～15人	2.7%	8.8%	1.6%	.5%	.0%	.0%	25人
		16人～20人	.0%	3.3%	1.1%	.5%	.0%	.0%	9人
		21人以上	.5%	9.9%	3.8%	.5%	1.1%	4.4%	37人
	回答者計		47人	102人	18人	5人	2人	8人	182人
高岡市	親しい友人の数(呉東)	0人	.5%	16.4%	6.0%	.5%	2.5%	3.0%	58人
		1～5人	1.0%	10.0%	17.9%	6.5%	4.0%	8.5%	96人
		6人～10人	.0%	.5%	4.5%	2.5%	1.5%	7.0%	32人
		11人～15人	.0%	.5%	.5%	.0%	.5%	1.5%	6人
		16人～20人	.0%	.0%	.0%	.5%	.0%	1.0%	3人
		21人以上	.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	3.0%	6人
	回答者計		3人	55人	58人	20人	17人	48人	201人

5 富山県における東西の差

5-1 呉東と呉西という区分の認知度

既述のとおり、富山県を東と西に二分する認識は一般的である。問11で「富山県が呉東と呉西という呼び名で分けられることがあるのを知っている」と答えた人は、富山市92.9%、高岡市96.5%、全体で94.8%だった。両市の間に、統計的に有意な差はない。両市をわけずに全体で分析したところ、現在の市の

居住期間が短い人ほど呉東・呉西という区分を知らないという関連性が見られた²⁷（表6を参照）。たとえば、居住期間が10年未満の52人のうち19.2%（10人）が、この分け方を知らなかった。ただし、呉東・呉西の区分を知らない23人のうち39.1%（9人）は、現在住んでいる市に20年以上の居住経験があった。

表6 「現在住んでいる地域の居住期間」と「呉東・呉西という区分の認知度」

	知らない	知っている	回答者計
10年未満	19.2%	80.8%	52人
10年～20年未満	8.9%	91.1%	45人
20年～30年未満	6.8%	93.2%	88人
30年以上	1.2%	98.8%	255人
合計	5.2%	94.8%	440人

5-2 呉東と呉西の違いについての全般的な認識

問11で「呉東・呉西という区分を知っている」と答えた人に、問11-1で「呉東と呉西にどのくらい違いがあるか」と質問している。「やや違いがある」と答えた人は、6割強（富山60.2%、高岡67.2%、全体64.0%）おり、「たいへん違いがある」と答えた人（富山10.6%、高岡10.1%、全体10.3%）を加えると、回答者のおよそ4分の3が、「呉東と呉西の間に、なんらかの違いがある」と考えている（表7）。高岡市民のほうが、富山市民よりも全般的に違いがあると答える傾向が見られるが、統計的に有意な差ではない。2000年から2001年にかけて富山大学人文学部日本語学研究室が富山県全域を対象におこなった調査でも、「呉東の人と呉西の人は『ちがう』と思うところがあると思いますか」の質問に「はい」と回答した人が71.7%いた（中井・小山 2004：163）。今回のわれわれの調査の結果も、おおむね妥当なものといえよう。

27 居住期間を「30年未満」と「30年以上」に2区分し、呉東・呉西という呼び名の認知度とカイ二乗検定をおこなうと、関連が見られた（ $\chi^2 = 20.088, df=1, p<.0005$ ）。

表7 現在の居住地域別の「呉東と呉西の違い（全般）」

	たいへん違いがある	やや違いがある	あまり違いはない	まったく違いはない	回答者計
富山市	10.6%	60.2%	26.7%	2.5%	161人
高岡市	10.1%	67.2%	20.1%	2.6%	189人
合計	10.3%	64.0%	23.1%	2.6%	350人

呉東と呉西の全般的な違いへの認識について、「違いがある」群と「違いはない」群の二つに再コードして²⁸、他の変数との関連を調べた。「居住地域への愛着」（問4）、「居住期間」（問2）とは関連がなかった。「年齢」（問23）については、高岡市では関連がなかったものの、富山市では関連があり²⁹、意外なことに、若い人ほど呉東と呉西に全般的な違いがあると回答した（表8）。これは、富山市の年齢の高い回答者が「昔にくらべれば、呉東と呉西の違いはなくなった」と感じているためかもしれない。ただし、両市をあわせて検定すると、年齢との関連は認められない。「性別」（問24）については、富山市の回答者において、女性のほうが、違いがあると答える傾向があったが、統計的に有意な差ではない。中井・小山の調査でも、女性のほうが呉東と呉西のちがいを認識している傾向が示されている（中井・小山 2004：163）。「学歴」（問25）については、両市をあわせた検定では、関連はなかったが、両市を分けて検定すると、富山市において、学歴が高い人ほど違いがあると答える関連性が見られた³⁰。「職業」（問26）については、「民間企業に勤務」する回答者が、違いがあると答える傾向が見られた³¹。商取引をするうえで違いを感じるのかもしれない。「配偶者の有無」（問27）については、両市をあわせた検定では、関連はなかったが、両市を分けて検定すると、高岡市において、配偶者がいる

28 「たいへん違いがある」「やや違いがある」をまとめて「違いがある」群、「あまり違いはない」「まったく違いはない」をまとめて「違いはない」群に再コードした。

29 年齢を「20代・30代」「40代・50代」「60代・70代」と3区分して、カイ二乗検定をおこなうと、富山市において関連が見られた（ $\chi^2 = 6.486, df = 2, p < .05$ ）。

30 学歴は、「初等教育」「中等教育」「高等教育」の3区分に再コードしたものをもちいた。富山市 $\chi^2 = 7.254, df = 2, p < .05$

31 「民間企業に勤務（パートやアルバイトを含む）」する回答者で、呉東と呉西に違いがあると答えた人の割合は、富山市79.2%（72人中57人）、高岡市79.5%（78人中62人）だった。

人ほど違いがあると答える関連性が見られた³²。「未成年の子どもの同居」(問28)については、関連性は見られなかった。

「他所での居住経験」(問1)については、両市をあわせて検定すると、生まれてからずっと現在住んでいる市に居住している人ほど、呉東と呉西に違いがあると答える傾向が見られ、統計的に有意であった³³(表9)。ただし、富山市と高岡市に分けると、同様に、生まれてからずっと住んでいる人ほど呉東と呉西に違いがあると答えるように見えるが、統計的に有意とは言えなくなる。問12でたずねた「富山に関するテレビニュースの視聴頻度」については、テレビニュースをよく見る人ほど呉東と呉西に違いはないと答えるように見えるが、統計的に有意な差はない。「呉東と呉西の親しい友人数」(問11-2)について調べると、呉東と呉西の全般的な違いについて、自分の居住地域外の友人数(富山市に居住している人は呉西の友人数、高岡市に住んでいる人は呉東の友人数)と関連はなかった。

表8 現在の居住地域別の「年齢」と「呉東と呉西の違い(全般)」

		違いがある	違いはない	回答者計
富山市	20～39歳	82.4%	17.6%	34人
	40～59歳	73.4%	26.6%	79人
	60～79歳	57.4%	42.6%	47人
	合計	70.6%	29.4%	160人
高岡市	20～39歳	73.7%	26.3%	38人
	40～59歳	76.9%	23.1%	65人
	60～79歳	79.5%	20.5%	83人
	合計	77.4%	22.6%	186人

表9 「現在住んでいる地域以外での居住経験」と「呉東と呉西の違い(全般)」

	違いがある	違いはない	回答者計
生まれてからずっと住んでいる	80.3%	19.7%	157人
別の市町村にも住んでいた	69.3%	30.7%	192人
合計	74.2%	25.8%	349人

32 高岡市 $\chi^2 = 7.177, df=1, p<.01$

33 $\chi^2 = 5.445, df=1, p<.05$

地域間の対抗意識は、その地域間の違いを意識させる可能性をもつ。問14で「富山大学経済学部を設置場所を富山市と高岡市のいずれにするかという議論が1953年頃にあったことを知っているか」とたずねた。「富山大学経済学部の設置場所をめぐる富山、高岡両市の誘致運動は、大学関係者及び県議会の勢力を二分しての大騒動に発展した」（富山県 1983：540）と言われ、いずれの側もゆずろうとせず、「呉西対呉東の対立感情にまで火がつく状況を呈した」（富山県 1983：541）という。現在富山市にある富山大学経済学部の前身は、1924年に創設された旧制高岡高等商業学校（高岡高商）である。1944年に軍部の要請で、高岡工業専門学校（高岡工専）に転換させられる。1949年の富山大学創設時には、高岡工専は、工学部として高岡市に設置されたが、旧高岡高商は、学部とはならず、文理学部経済学科に引き継がれた。富山市にあった文理学部経済学科の経済学部昇格が、1952年夏頃、濃厚となり、富山市と高岡市の誘致運動が激しくなった。高岡市は、1953年10月、市民大会を開いて挙市一丸の運動を展開し、臨時市議会で地元負担金1億1100万円を満場一致で可決した。同年11月、富山県は、臨時県議会を開き、23票対19票（白票1）で高岡市設置を決定する。これで、文部省の当初の富山存続案が修正される可能性が出てきた。しかし、富山市側は、国の方針を盾に猛反撃に出て、呉東出身の国会議員を巻き込んでの大運動を展開した。県内での解決が難しくなり、文部省に現地の再調査を依頼し、その決定にしたがうことになる。文部省の判定の結果、富山市設置が決まった。もともと学校が高岡高商として、20年間、高岡市にあったことを考えれば、この決定は、高岡市の人びとに、かなり悔しい思いをさせたにちがいない。

問14の結果をみると、富山大学経済学部の設置場所論争を知る人の割合は、富山市14.4%、高岡市26.2%で、高岡市のほうが高い。これは、統計的に有意な差である³⁴。悔しい思いをした高岡市の人びとのほうが、この出来事を忘れ

34 $\chi^2 = 9.189, df=1, p < .005$

ないということだろう。当然かもしれないが、年齢が高い人ほどこの論争を知る人の割合が高い³⁵。また、高岡市では、女性よりも、男性のほうがこの出来事をよく覚えている³⁶。この設置場所論争の認知と、呉東と呉西の全般的な違いへの認識について調べると、設置場所論争を知る人ほど呉東・呉西に違いがあると答える関連性が見られた³⁷（表10）。ただし、富山市と高岡市にわけて、同じ検定をおこなうと、統計的に有意な関連性は消えてしまう。しかし、この設置場所論争を知る人ほど呉東と呉西の違いを感じている傾向は一貫しており、特に、年齢の高い人ほどその傾向が強い³⁸。

表10 「富山大学経済学部設置場所論争の認知」と「呉東と呉西の違い(全般)」

	違いがある	違いはない	回答者計
知っている	84.4%	15.6%	77人
知らない	71.9%	28.1%	260人
合計	74.8%	25.2%	337人

5-3 呉東と呉西の違いについての個別的な認識

問11-1では、さらに、「食事」「言葉づかい」「年中行事」「人柄」について呉東と呉西の違いをたずねた。これらのいずれの項目でも、両市の間に、回答の差はほとんどない。それぞれの項目をみると、「食事」は、違いが「ない」と答える人が半数を超えた。「人柄」については、違いが「ある」と言う人と「ない」と言う人が、ほぼ半々に分かれた。「言葉づかい」と「年中行事」については、違いが「ある」と答えた人が多く、特に「言葉づかい」について呉東と呉西の違いを強く感じているようである。おおよそ、「言葉づかい→年中行事→人柄

35 $\chi^2 = 57.418, df=5, p<.0005$

36 高岡市 $\chi^2 = 7.808, df=1, p<.01$

37 $\chi^2 = 4.916, df=1, p<.05$

38 60代・70代では、両者に統計的に有意な関連が認められた。 $\chi^2 = 5.777, df=1, p<.05$

→食事」の順で、呉東と呉西の違いを感じている³⁹（表11）。

表11 現在の居住地域別の「呉東と呉西の違い(食事)(言葉づかい)(年中行事)(人柄)」

		たいへん 違いがある	やや違いが ある	あまり違いは ない	まったく違い はない	回答者計
食事	富山市	6.7%	39.3%	48.7%	5.3%	150人
	高岡市	3.4%	38.6%	50.0%	8.0%	176人
	合計	4.9%	39.0%	49.4%	6.7%	326人
言葉づかい	富山市	19.9%	69.6%	8.8%	1.8%	171人
	高岡市	14.9%	67.7%	15.4%	2.0%	201人
	合計	17.2%	68.5%	12.4%	1.9%	372人
年中行事	富山市	21.1%	58.6%	18.4%	2.0%	152人
	高岡市	13.9%	57.2%	26.1%	2.8%	180人
	合計	17.2%	57.8%	22.6%	2.4%	332人
人柄	富山市	11.8%	41.8%	40.5%	5.9%	153人
	高岡市	11.9%	43.2%	38.6%	6.3%	176人
	合計	11.9%	42.6%	39.5%	6.1%	329人

5-4 食事における東西の差

今回の調査では、呉東と呉西の食事について、56.1%の回答者が「あまり違いはない」「まったく違いはない」と答えた。しかし、これまでに、さまざまな呉東と呉西の食生活の違いが指摘されている。たとえば、イルゴ（ユルゴ）と呼ばれるくず米の粉の食べ方は、呉西では、煎って石臼ですった粉を茶碗のなかに入れて熱いお湯で練り、耳たぶくらいの柔らかさにして食べるのに対し、呉東では、コママという食べ方をして、そのくず米の粉をそのままご飯の上にかけて食べるか、あるいは、ご飯が炊きあがる寸前に粉を載せて蒸らし、ご飯が炊きあがったところでそれを交ぜて食べたという。また、ゾロという食べ物

39 中井・小山の調査でも、「呉東と呉西で『ちがひ』があると思う人はどこが違うと思いますか」と自由回答形式でたずねており、アフター・コーディングの結果、全体の回答のなかで上位だったものとして、「言葉・方言」(56.2%)、「性格・気質」(15.4%)、「文化・伝統」(6.9%)が指摘されている（中井・小山 2004: 167）。

は、呉東では、くず米の粉に水を差して、おかゆ状に煮たものを指すのに対し、呉西では、冷たいご飯にみそ汁を入れて味付けした雑炊を意味する。呉西のゾロにあたる食べ物は、呉東では、メソズ、ミソズ、ミソズンと呼ばれるという（佐伯 1998：196-8）。

さらに広く見ると、日本の食文化は、地質構造で日本列島を東西に二分する糸魚川・静岡構造線を一つの境に、東日本と西日本に分かれることが多い⁴⁰。富山県は、その東西食文化の接点にあたる。たとえば、年末年始に食べる餅は、西日本では丸餅、東日本では四角い切り餅が多いが⁴¹、富山県では、加賀藩領だった五箇山や魚津市を除いて、切り餅が多く、東日本の食文化圏になる。大晦日の年越しに縁起をかついで食べる年取り魚⁴²は、西日本ではブリ、東日本ではサケと二分される⁴³が、富山県は、西日本のブリの食文化圏となる（市川 1999：17-9）。

今回の調査では、問18で「年取り魚」についてたずねた。「鱒を年取り魚としてお歳暮に贈る慣習は、初代加賀藩主前田利家の時代からあった」（市川 2002：10）と言われるが、そもそも「年取り魚は食べない」と回答した人が、富山市60.0%、高岡市53.9%もいた。ブリを食べると回答した人は、富山市31.4%、高岡市37.0%で、高岡市がやや多いが、統計的に有意な差ではない。サケを年取り魚として食べる人も、富山市4.3%、高岡市5.7%いた。年齢が高

40 「東西の食文化の日本海側の接点は主に新潟県から富山県付近に存在すること、各々の食文化について東西の接点を示すラインの多くが佐渡の東側から新潟県南西部を通って南下する」（本間 1999：71）。

41 丸餅の分布の東限界は、能登・加賀・越前・近江・伊賀・大和・紀伊をむすぶ線になるという（市川 1999：18）。

42 信州では、次のように、年取り魚としてブリを食べていた。「塩鱒は家長が魚屋に買いに来るのが、古くからの習わしであった。男としての見栄と懐勘定を勘案して、できる限りよいものを買ったのである。塩鱒を買っても、大晦日まで手をつけられない。その日の午後、一家の主人が鱒を解体するが、切り落とした尾を神棚に供えた。年取りの晩には塩鱒の焼き物が、各人に一切れずつ出される。また元旦には雑煮に鱒が入れられる」（市川 2002：15-6）。

43 年取り魚のブリとサケの境界線は、佐渡島の東からスタートし、糸魚川市を中心とする西頸城地方と上越市を中心とする中頸城地方の間をとって、長野県を縦断して木曾谷と伊那谷の間をとると推定されている（本間 1999：54）。

い人ほど年取り魚としてブリを食べる人が多く、高岡市に住む60代・70代の44.7%（103人中46人）は、ブリを食べると回答している（表12）。

表12 現在の居住地域別の「年齢」と「年取り魚」

		ブリ	サケ	その他の魚	年取り魚は 食べない	回答者計
富山市	20～39歳	27.7%	2.1%	2.1%	68.1%	47人
	40～59歳	30.2%	1.0%	4.2%	64.6%	96人
	60～79歳	35.8%	10.4%	6.0%	47.8%	67人
	合計	31.4%	4.3%	4.3%	60.0%	210人
高岡市	20～39歳	20.9%	2.3%	0.0%	76.7%	43人
	40～59歳	36.1%	7.2%	2.4%	54.2%	83人
	60～79歳	44.7%	5.8%	5.8%	43.7%	103人
	合計	37.1%	5.7%	3.5%	53.7%	229人

年取り魚は、ハレの日の特別な食べ物である。今回の調査では、日常食である「肉じゃが」と「うどん」についても調べた。

豚肉と牛肉も、東日本と西日本で消費が異なる食べ物である。東日本では豚肉の消費が多く、西日本では牛肉の消費が多い。2004年におこなわれた全国消費実態調査⁴⁴における2人以上全世帯の1ヶ月の1世帯あたりの「生鮮肉」の消費金額のデータをもとに、「牛肉」「豚肉」「鶏肉」「合いびき肉」「他の生鮮肉」のシェアの全国平均を1としたときの、各都道府県における各生鮮肉のシェアの割合を表す特化係数を算出した。この特化係数は、たとえば、富山県の牛肉の特化係数が1より大きければ、生鮮肉全体の消費金額における牛肉の消費金額のシェアが、全国平均のシェアよりも大きいという意味になる。北陸地方の4県について、牛肉の特化係数を西から見ていくと、福井県1.176、石川県1.066、富山県1.077、新潟県0.657となり、西のほうが牛肉をよく購入している。次に、豚肉の特化係数を西から見ていくと、福井県0.842、石川県1.000、

44 総務省統計局が実施。家計の実態を、所得・消費・資産の3面から総合的にとらえるために、1959年以降5年ごとにおこなわれている。2004年調査は10回目にあたる。標本調査でおこなわれ、標本は、2004年の調査では、2人以上世帯5万4372世帯、単身世帯5002世帯である（総務省統計局2006）。

富山県1.039, 新潟県1.421となり、逆に、東のほうが豚肉をよく購入している。富山県は、牛肉と豚肉のいずれも、消費金額のシェアが全国平均を上回るが、その分、鶏肉の消費金額が小さい。

こうした事情を反映して、「肉」という言葉を聞いたとき、西日本では「牛肉」を想像し、東日本では「豚肉」をイメージするという。NHK放送文化研究所が実施した平成15年度の「ことばのゆれ」全国調査⁴⁵によれば、「肉＝牛肉派」の割合は、東日本（北海道・東北・関東・甲信越・東海）で46%であるのに対して、西日本（関西・北陸・中国・四国・九州沖縄）では84%と圧倒的多数になる（塩田 2003）。関西で、豚肉の入った肉まんをわざわざ「豚まん」と呼ぶのは、このためである（前垣 2002：181）。

今回の調査では、牛肉と豚肉の使い分けがはっきり表れそうな日常食の肉じゃがをとりあげた。肉じゃがは、100年前に誕生した比較的新しい料理である。明治期の日本海軍の司令官として活躍した東郷平八郎が、イギリスのポーツマスへの留学中に食べたビーフシチューを模して、部下に艦上食として作らせたのが、肉じゃがの始まりと言われる。当時は、「じゃがいものうま煮」と呼ばれたこの料理が、「肉じゃが」として一般の家庭に定着するのは、1973年頃という（前垣 2002：49）。誕生時には、牛肉がもちいられた肉じゃがだが、その後の牛肉価格の高騰とともに、東日本を中心に豚肉も広くもちいられるようになった。肉じゃがの豚肉と牛肉の境界線は、太平洋側では、愛知県豊橋市のあたりになるという指摘がある（前垣 2002：50）。

調査結果を見ると、肉じゃがに入れる肉は「牛肉が多い」と答えた人は、富山市66.2%、高岡市62.3%だった。呉東は豚肉、呉西は牛肉の消費が多いと言われるが、肉じゃがにかぎっては、両市に差はなかった。「豚肉が多い」と答えた人は、富山市33.8%、高岡市37.7%だった。「年齢」（3区分）との関係性を調べると、高岡市では、年齢による違いはない。しかし、富山市では、統計的

45 有効回答数（率）1446人（72.3%）、層化副次（二段）無作為抽出法、2003年5月9日～12日実施。

に有意ではないが、年長の人ほど牛肉を入れる傾向が見られる。

うどんのつゆも、しばしば東日本と西日本で食文化が違う例としてあげられる。関東風のうどんのつゆは、醤油をベースとした濃い味付けで、見た目が黒っぽいのにに対し、関西風のつゆは、だしをベースとした薄い味付けで、見た目は黄色っぽい⁴⁶。こうした違いは、うどんにかぎらず、関東と関西の料理全般にわたっており、自然環境の違いに由来するという⁴⁷。こうした事情を反映して、日清食品のインスタントのカップうどん「きつねどん兵衛」でも、新潟県糸魚川市と静岡県富士川を結ぶフォッサマグナを境界線に、東日本と西日本でつゆの味を変えている（前垣 2002：33）。

今回の調査では、富山市と高岡市の違いがはっきり表れた。家庭で食べるうどんのつゆに、高岡市では、関西風のだしベースのつゆをもちいる人が4分の3と多かったが、富山市では、関東風の醤油ベースのつゆと関西風のつゆをもちいる人が半々であった。両市の差は、統計的に有意な差である⁴⁸。また、「年齢」（3区分）による違いはなかった（表13）。「現在住んでいる市の居住期間」（4区分）による違いもなかった。

46 「うどんのつゆは関東と関西では異なっている。一般的に東日本では濃厚なつゆを、西日本では薄味のつゆを用いる。関東ではそば屋の基本的な調味料である、濃口醤油を煮ながらみりんや砂糖を加えてつくるかえしと呼ばれる下地を用いる。このかえしを基本に、昆布、鰹節を基本としただしで割って作っており、そばつゆに近い。うどんとそばの双方を供する店の多くでは同一のつゆを用いる。一方、関西では昆布、鯖節、鰹節などの複数のだしを基本にしており、椎茸や炒り子（イワシの煮干しを炒ったもの）をアクセントとして使う。椎茸は甘味、炒り子は辛味が出る。醤油はうすくち醤油を使うことが多い。つゆの色は薄く澄んでいる」（ウィキペディア 2006）。

47 関東の土は地味が薄く、味の劣る野菜しか育たず、また、東京湾の魚も生臭さの残る大味の赤身魚が多いため、野菜と魚のいずれを料理する時も、醤油の濃い味に頼らざるを得なかった。それに対し、関西は、淀川水系の恵まれた土壌のおかげで、良質の野菜が育ち、また、瀬戸内海では繊細な味の白身魚が多くとれるため、素材の味を活かそうと、料理人たちは、醤油をできるだけ使わないようにしたという（前垣 2002：24-5）。

48 $\chi^2 = 43.502, df = 2, p < .005$

表13 現在の居住地域別の「年齢」と「うどんのつゆ」

		醤油ベース(関東風)	だしベース(関西風)	回答者計
富山市	20～39歳	48.9%	51.1%	45人
	40～59歳	52.2%	47.8%	92人
	60～79歳	50.8%	49.2%	65人
	合計	51.0%	49.0%	202人
高岡市	20～39歳	22.5%	77.5%	40人
	40～59歳	23.8%	76.3%	80人
	60～79歳	18.0%	82.0%	100人
	合計	20.9%	79.1%	220人

5-5 言葉づかいにおける東西の差

問11-1でたずねた「呉東と呉西の違い」のうち、「言葉づかい」は、回答者をもっとも違いを感じていた項目である。言葉づかいに「たいへん違いがある」「やや違いがある」と答えた人は、あわせて85.7%であった。高い割合のひとが言葉づかいに違いを感じる理由の一つには、富山県の言葉の語彙がたいへん多様性に富むことがあげられる（真田 2004）。

富山県は、西日本の言葉が分布する地域の東端に位置する。文化の中心地であった近畿地方から富山県へ新しく生まれた言葉が続々と伝播してきたが、3000m級の立山連峰が東進を阻むために、富山県にはさまざまな古い言葉が残り、古語の博物館と称されることもある。さらに、その上に、新しい言葉が幾重にも積み重なる。富山県の方言は、概してあまり大きな地域差を示さないとされるが、おおよそ、西日本方言の影響を色濃く反映する「呉西」、その影響の少ない「呉東」、そして中部山岳地域の辺境方言使用地域である「五箇山」（旧利賀村・旧平村・旧上平村）の3地域に区分される（平山 1998：2）。

方言を調査して標準語の選定を目指した1902年設置の国語調査委員会は、1906年の『口語法調査報告書』のなかで、親不知と浜名湖をむすぶいわゆる

東西方言境界線が画定できるとした⁴⁹。たとえば、動詞の命令形では、東「起きろ」、西「起きよ、起きい」、動詞の音便形では、東「買った」、西「買った(こうた)」、形容詞の音便形では、東「白くなった」、西「白うなった、白なった」、打消の助動詞では、東「行かない」、西「行かん、行かぬ」、断定の助動詞では、東「これだ」、西「これぢゃ、これや」などがある(真田 2002:34)。

富山県における東西の言葉の違いを語るとき、しばしば引き合いに出されるのが、塩の味である。塩の味は、東日本では「シヨッパイ」が一般的で、西日本では「カライ」が一般的である。あらたまった場合には、東西ともに「シオカライ」となることが多い(真田 2002:104)。富山県には、「シヨッパイ」と「カライ」を足しあわせた「シヨッカライ」という表現もある。

今回の調査では、問21で「味付けで塩の味が強い場合、なんと表現しますか」とたずねた。その結果、両市の間に統計的に有意な差があった。塩の味が強いことの表現として、富山市では、「シヨッカライ」がもっとも多く(41.6%)、次いで、「シヨッパイ」(32.1%)、「シオカライ」(19.1%)であった。これに対して、高岡市では、一般に味が濃い場合に使われる「クドイ」(44.8%)が、塩味が強いことの表現としてもっとも使われ、次いで、「シヨッパイ」(22.6%)、「シヨッカライ」(15.2%)となった⁵⁰。

「年齢」(3区分)別にみると、高岡市では、年齢に関係なく「クドイ」と表現する人が4割を超える。これに対して、富山市では、年齢が若いほど「シヨッパイ」を使うが増え、20代・30代では、半数弱の人が「シヨッパイ」を使う(表14)。

49 「仮二全国ノ言語区域ヲ東西二分カタントスル時ハ大略越中飛騨美濃三河ノ東境二沿其境界線ヲ引キ此線以東ヲ東部方言トシ、以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ルガ如シ」(真田 2002:33)。ただし、この東西方言境界線は、ごくおおざっぱに言葉の境界を示したもので、細かく事例を見ていくと、必ずしも境界線に一致しない。特に、太平洋側で一致しない傾向が強い。民俗学者の柳田国男が唱えた「方言圏論」のように、日本の言葉を東と西で対立するとはとらえない立場もある。真田は、『東西方言境界線』という虚構に必要以上にこだわらないほうがいいのではないのでしょうか(真田 2002:37)と書いている。

50 『富山県言語動態地図』によれば、旧福岡町の全域で「クドイ」をもちいることが示されている(中井・坂口 2001:14)。今回の調査で、高岡市で「クドイ」が突出した理由は、旧福岡町と合併した後の新高岡市を調査対象とした可能性もある。

「現在住んでいる市の居住期間」（４区分）ごとに見ると、高岡市でも、居住期間が10年未満の人では、「クドイ」を使う人は4.3%（23人中1人）にすぎず、あらたまった表現の「シオカライ」（39.1%）と「シヨッパイ」（30.4%）が多い。しかし、10年以上高岡市に居住している人の４割以上は、「クドイ」と表現する。一方、富山市では、居住期間20年が一つの区切りになっており、居住期間が20年未満の富山市の人で「シヨッカライ」と表現する人は２割台にとどまり、「シヨッパイ」を使う人は４割を超えた。逆に、20年以上富山市に住む人では、４割以上の人が「シヨッカライ」をもちいる（表15）。

表14 現在の居住地域別の「年齢」と「塩味の強いときの表現」

		クドイ	シヨッカライ	シオカライ	カライ	シヨッパイ	回答者計
富山市	20～39歳	6.4%	36.2%	8.5%	.0%	48.9%	47人
	40～59歳	5.2%	44.8%	18.8%	1.0%	30.2%	96人
	60～79歳	4.5%	40.9%	27.3%	4.5%	22.7%	66人
	合計	5.3%	41.6%	19.1%	1.9%	32.1%	209人
高岡市	20～39歳	44.2%	9.3%	14.0%	7.0%	25.6%	43人
	40～59歳	41.0%	19.3%	8.4%	2.4%	28.9%	83人
	60～79歳	47.6%	14.6%	18.4%	2.9%	16.5%	103人
	合計	44.5%	15.3%	14.0%	3.5%	22.7%	229人

表15 現在の居住地域別の「現在住んでいる地域の居住期間」と「塩味の強いときの表現」

		クドイ	シヨッカライ	シオカライ	カライ	シヨッパイ	回答者計
富山市	10年未満	7.1%	25.0%	25.0%	.0%	42.9%	28人
	10年～20年未満	4.8%	28.6%	23.8%	.0%	42.9%	21人
	20年～30年未満	.0%	45.8%	16.7%	2.1%	35.4%	48人
	30年以上	7.2%	46.8%	18.0%	2.7%	25.2%	111人
	合計	5.3%	41.8%	19.2%	1.9%	31.7%	208人
高岡市	10年未満	4.3%	8.7%	39.1%	17.4%	30.4%	23人
	10年～20年未満	45.8%	20.8%	8.3%	4.2%	20.8%	24人
	20年～30年未満	43.9%	12.2%	14.6%	.0%	29.3%	41人
	30年以上	51.4%	16.2%	10.6%	2.1%	19.7%	142人
	合計	44.8%	15.2%	13.9%	3.5%	22.6%	230人

先に年取り魚としてふれたブリは、成長段階によって名称が変化するいわゆる「出世魚」である。ブリの成長段階名には、地域によって異なり、関西の「ツバス→ハマチ→メジロ→ブリ」に対し、関東では「ワカシ→イナダ→ワラサ→ブリ」となる。富山県内でも地域差があり、県東部の「ツバイソ→フクラギ→チューモン→ブリ」に対して、ブリの水揚げ1位を誇る氷見市の位置する県西部は「コズクラ→フクラギ→ガンド→ブリ」である⁵¹。フクラギとブリの名称は、富山県の東西で共通である。東西の違いを特徴づけるのは、富山県東部から新潟県糸魚川市にかけて使われるチューモンと、富山県西部から石川県にかけて使われるガンドという呼び名である（川本 1989；中井 2004）。

今回の調査では、問19で、呉西に特徴的な「ガンド」という呼び方をするかたずねた。ガンドと呼ぶ人は、富山市32.7%、高岡市59.6%で、統計的に有意な差があった⁵²。「年齢」（3区分）との関係を見ると、20代・30代でガンドと呼ぶ人は、他の年齢層の半分程度になり、富山市19.1%、高岡市32.6%である。年齢とガンドの呼び名には、高岡市では、統計的に有意な関連が認められた⁵³が、富山市では、認められなかった。

富山県の人びとは、語尾に「ちゃ」をつけて話す人が多い。たとえば、「そんなこと、ないちゃ」（そんなことはないよ）、「あんたに、あげっちゃ」（あなたにあげるよ）、「この字ちゃ、どう読むがか」（この字って、どう読むの？）などである。このため、富山県の言葉は、「ちゃちゃ弁（ちゃーちゃー弁）」⁵⁴と呼ばれることもある。この「ちゃ」は、「よ」と訳せる既定事項を表す終助

51 氷見市では、コズクラの前段階を、東部と同様にツバイソと呼ぶことがある。また、魚津では、チューモンの段階をハマチと呼ぶこともある。どの呼び名がどの大きさの魚を指すかは区別が曖昧だが、氷見では、ツバイソは全長が18cmくらいまで、コズクラは25cmくらいまで、フクラギは45cmくらいまで、ガンドは60cmくらいまでで、それ以上をブリと呼ぶ。市場では、8kg以上のものをブリと呼んであつかう（稲村 2002：51-52）。

52 $\chi^2 = 31.680, df=1, p<.005$

53 高岡市 $\chi^2 = 16.699, df=2, p<.0005$

54 富山県の旧福光町（現在は南砺市）には、「福光のチャチャ弁」という昔話が残っている。法事に来たお坊さんに、東京から来た嫁がお茶を出そうとして、お坊さんにどうしてお茶がいいかたずねたところ、お坊さんの返答のなかの、お茶と語尾の「ちゃ」が聞き分けられず困ったという笑い話である（石崎 2006）。

詞で使われたり、「は」「とは」「って」と訳せる主題を表す助詞で使われたりする（小西 2004:43-6）。終助詞の「ちゃ」は、富山県下に広く使われており、富山県の中心部から徐々に拡散したと考えられている（中井・坂口 2001：45, 90）。

問22の結果からも、「ちゃ」が広く使われていることがうかがえる。「ちゃ」という語尾の会話をする人が「よくある」「ややある」と回答した人は、富山市67.8%、高岡市62.4%だった。両市の間に差は認められない。ただし、「まったくない」と答えた人も、1割強いた。「年齢」（3区分）でみると、年齢が高い人ほど「ちゃ」を使わない傾向が見られ、高岡市では、統計的に有意な関連があった⁵⁵。「ちゃ」という語尾を使うことが「よくある」「ややある」を「ある」群、「あまりない」「まったくない」を「ない」群にまとめて、「居住期間」（4区分）との関係を調べると、富山市の居住期間20年未満の人では、「ない」群のほうが6割強で多数派であった。富山市では、居住期間が長くなるほど、「ちゃ」の使用頻度が高くなる関連性が見られ、統計的に有意だった⁵⁶。高岡市でも、10年未満の人は「ない」群のほうが6割強で多数派だったが、統計的に有意な関連性は認められなかった。また、「性別」による「ちゃ」の使用頻度の違いは見られなかった。

若者言葉についても調べたいと思い、問20で「大手ハンバーガーチェーン店のマクドナルドの省略形」についてたずねた。一般に、関西圏では「マクド」と省略し、それ以外では「マック」と省略すると言われる⁵⁷。今回の調査結果では、両市とも「マック」と省略する人が多数派だが、富山市76.3%、高岡市67.1%と、富山市のほうが「マック」派が多く、両市の間に統計的に有意な差が認められた⁵⁸。この結果は、一見、富山市のほうが、関東の影響を強く受けているよう

55 高岡市 $\chi^2 = 17.241$, $df=6$, $p<.01$

56 富山市 $\chi^2 = 24.671$, $df=3$, $p<.0005$

57 2005年11月9日の『読売新聞』朝刊13面「新日本語の現場——方言の今(1)」によると、「マクド」は、大阪、京都、奈良、滋賀、和歌山、三重、徳島の7府県、「両方」は、兵庫、広島、新潟、宮崎の4県、「マック」は、その他の36都道府県で使われているという。

58 $\chi^2 = 4.119$, $df=1$, $p<.05$

に見えるが、実際には、そうではないようである。「年齢」（3区分）別に見ると、20代・30代の大多数は、「マック」と省略すると答えており（富山市95.7%、高岡市88.1%）、年齢があがるにつれて「マクド」派が増えていく⁵⁹。高岡市の60代・70代の実に59.1%は、「マクド」と省略すると答えた。日本でマクドナルドの第1号店が銀座三越1階にオープンしたのは、今から35年前の1971年であり、60代・70代の人たちは、マクドナルドをあまり利用しないと思われる。したがって、年齢が高くマクドナルドをよく知らない人たちは、マクドナルドという字面だけから、省略形を推測した可能性が高い。字面のみで判断すれば、前3文字をとった「マクド」が、いちばん素直な省略のしかたであろう。

今回の調査では、語彙の違いだけでなく、「話すときのスピード」（問11-3）と「イントネーション」（問11-4）の違いについてもたずねた。話すスピードでは、両市の間に統計的に有意な差が見られた⁶⁰。もっとも回答が多かったのは、「変わらない」（富山市39.7%、高岡市41.7%）だが、富山市では「呉東が速い」と答える人が多く、逆に、高岡市では「呉西が速い」と答える人が多かった。理由は不明だが、それぞれ自分たちの暮らしている地域のほうが「話すスピードが速い」と回答している。イントネーションについては、両市とも、7割近い人が呉東と呉西の間に違いがあると考えていたが、両市の間に、統計的に有意な差は認められなかった。

5-6 人柄における東西の差

ここから、問11-1で、回答者全体の54.5%が、呉東と呉西の間に何らかの「違い」を感じている人柄について見ていく。問11-5では、「おっとり」「せっかち」「けち」「こつこつ稼ぐ」「気前がよい」「積極的」「ふまじめ」「柔軟」「消極的」「が

59 両市とも、「年齢」（3区分）と「マクドナルドの省略形」の間の関連性は、統計的に有意であった。富山市 $\chi^2 = 17.293$, $df=2$, $p < .0005$, 高岡市 $\chi^2 = 46.871$, $df=2$, $p < .0005$

60 $\chi^2 = 7.623$, $df=2$, $p < .05$

んこ」「人づきあいがいい」「商売上手」「人づきあいがわるい」「現実を重視する」「理想を重視する」「まじめ」という人柄を表す16項目について、呉東と呉西のそれぞれに対して、「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4つの回答選択肢を設定して質問した。人柄は、個人ごとの差が大きい。また、同じ呉東・呉西内であっても、海側と山側では人柄が異なるという意見もある。今回の調査は、かなりあいまいな質問の仕方になっており、実際の人柄をたずねるというよりは、「イメージとしての典型的な人柄」をたずねるということになる。

表16は、回答選択肢を「よくあてはまる」＝1点、「ややあてはまる」＝2点、「あまりあてはまらない」＝3点、「まったくあてはまらない」＝4点と点数化し、人柄の各項目の平均点を求めたものである。点数が小さいほど、その項目の人柄がよくあてはまる。「全体平均」は、呉東と呉西を分けずに該当する項目全体の平均点を求めたものである。この全体平均は、近似的に、富山県の県民性を表しているとも言えよう。表16では、この全体平均をもとに昇順で並べてある。したがって、表の上の項目ほど、富山県民によくあてはまる人柄となろう。

各項目の並びを見ると、対照的な人柄の項目（例:「まじめ」と「ふまじめ」）が、表の上下でほぼ対称的に位置することから、回答結果は信頼性が高いと判断できる。また、人柄の16項目を呉東・呉西に分けて合計32項目について信頼性分析をおこなったところ、クロンバックのアルファ係数は0.894、ガットマンの折半法信頼係数0.849となり、信頼性の高いことが確認できた。

表16 呉東と呉西の人柄の違い（各項目の平均値の比較，すべての回答者）

	全体平均	呉東平均	呉西平均	呉東－呉西	符号付順位 和検定
まじめ	1.93	1.93	1.93	0.00	n.s.
こつこつ稼ぐ	2.09	2.22	1.97	0.25	p<.0005
現実を重視する	2.25	2.26	2.23	0.03	n.s.
がんこ	2.28	2.38	2.19	0.20	p<.0005
商売上手	2.32	2.50	2.15	0.35	p<.0005
人づきあいがいい	2.34	2.37	2.32	0.05	n.s.
けち	2.44	2.60	2.28	0.32	p<.0005
せっかち	2.46	2.54	2.39	0.15	p<.0005
消極的	2.53	2.56	2.50	0.07	n.s.
積極的	2.53	2.47	2.59	-0.12	p<.01
気前がよい	2.64	2.62	2.66	-0.05	n.s.
おっとり	2.65	2.61	2.68	-0.08	n.s.
柔軟	2.69	2.64	2.73	-0.09	p<.05
理想を重視する	2.70	2.66	2.74	-0.07	n.s.
人づきあいがわるい	2.76	2.76	2.76	-0.01	n.s.
ふまじめ	3.13	3.14	3.12	0.02	n.s.

同一の回答者が、人柄の16項目それぞれで呉東と呉西について答えているので、同一の人柄の項目について呉東と呉西の差を見るには、対応のあるグループ間の差の検定をおこなう必要がある。そこで、ウィルコクソン符号付順位検定をした結果、統計的に呉東と呉西に有意な差があらわれたのは、「こつこつ稼ぐ」「がんこ」「商売上手」「けち」「せっかち」「積極的」「柔軟」の7項目だった。「積極的」「柔軟」は呉東によりあてはまる人柄であり、残りの5項目はすべて呉西によりあてはまる人柄である。特に呉東と呉西の差が大きかった「こつこつ稼ぐ」「がんこ」「商売上手」「けち」は、呉西の人びとの人柄をよく表しているとともに、表の上位に位置することから、富山県の県民性とも重複する項目とも言える。

表17・18は、富山市と高岡市のそれぞれの回答者のみで、同様に、呉東と呉西の人柄について平均値を算出したものである。

表17 呉東と呉西の人柄の違い（各項目の平均値の比較、富山市の回答者のみ）

	全体平均	呉東平均	呉西平均	呉東－呉西	符号付順位 和検定
まじめ	1.96	1.94	1.99	-0.06	n.s.
こつこつ稼ぐ	2.12	2.13	2.10	0.03	n.s.
現実を重視する	2.29	2.28	2.29	-0.01	n.s.
がんこ	2.33	2.34	2.32	0.02	n.s.
商売上手	2.37	2.67	2.07	0.60	p<.0005
人づきあいがいい	2.38	2.43	2.33	0.10	n.s.
けち	2.51	2.61	2.41	0.20	p<.05
せっかち	2.50	2.48	2.53	-0.06	n.s.
消極的	2.60	2.55	2.65	-0.10	p<.05
積極的	2.55	2.57	2.54	0.03	n.s.
気前がよい	2.65	2.59	2.72	-0.13	n.s.
おっとり	2.68	2.70	2.65	0.05	n.s.
柔軟	2.71	2.69	2.74	-0.05	n.s.
理想を重視する	2.74	2.72	2.75	-0.02	n.s.
人づきあいがわるい	2.79	2.78	2.80	-0.02	n.s.
ふまじめ	3.15	3.16	3.14	0.03	n.s.

表18 呉東と呉西の人柄の違い（各項目の平均値の比較、高岡市の回答者のみ）

	全体平均	呉東平均	呉西平均	呉東－呉西	符号付順位 和検定
まじめ	1.90	1.92	1.89	0.04	n.s.
こつこつ稼ぐ	2.06	2.30	1.87	0.43	p<.0005
現実を重視する	2.21	2.24	2.18	0.05	n.s.
がんこ	2.24	2.42	2.08	0.34	p<.0005
商売上手	2.28	2.36	2.21	0.14	p<.05
人づきあいがいい	2.31	2.31	2.32	0.00	n.s.
けち	2.38	2.60	2.18	0.42	p<.0005
せっかち	2.42	2.60	2.27	0.33	p<.0005
消極的	2.47	2.57	2.37	0.20	p<.005
積極的	2.51	2.38	2.64	-0.25	p<.0005
気前がよい	2.63	2.64	2.62	0.02	n.s.
おっとり	2.62	2.52	2.71	-0.19	p<.01
柔軟	2.67	2.60	2.73	-0.13	p<.05
理想を重視する	2.67	2.61	2.73	-0.12	p<.05
人づきあいがわるい	2.74	2.74	2.73	0.01	n.s.
ふまじめ	3.10	3.11	3.10	0.01	n.s.

表17・18から、高岡市民のほうが、呉東と呉西の人柄を区別する傾向にあることがわかる。呉東と呉西の間に統計的に有意な差のあった項目は、富山市

民のみの集計では、3項目にすぎなかったが、高岡市民のみの集計では、10項目もあった。ただし、問11-1の「呉東と呉西の違い（人柄）」と「現在の居住地域（富山市・高岡市）」についてのカイ二乗検定では、両市の間に統計的な有意差はない。

回答者全体の集計で呉東と呉西の間に統計的に有意な差の見られた「こつこつ稼ぐ」「がんこ」「商売上手」「けち」「せっかち」「積極的」「柔軟」の7項目のうち、「けち」「商売上手」は、富山市民と高岡市民の両方が、呉西の人柄の特徴として考えている項目である。「こつこつ稼ぐ」「がんこ」「せっかち」は、主に、高岡市民が考える呉西の人柄の特徴と言える。「積極的」「柔軟」は、主に、高岡市民が考える呉東の人柄の特徴であることがわかる（表19）。

「積極的」は、それぞれ、富山市民は「呉東」、高岡市民は「呉西」によくあてはまると考えており、互いに相手よりも自分たちのほうが消極的だと規定している。富山県では、県外から来た人を「旅の人」と称することがある。この言葉は、地元の人間とそれ以外の人を峻別し、外部からの新しい人を受け入れようとしない閉鎖性を示すと言われることもある。この回答結果は、両市の人びとが、自分たちの一種の保守性を自覚していることの表れかもしれない。また、「選挙投票」の項で述べたように、政治的にも、富山県は「保守王国」である。

表19 富山市民と高岡市民が考える呉東と呉西の人柄の特徴

	富山・高岡市民の両方	富山市民のみ	高岡市民のみ
呉東		「消極的」	「積極的*」「柔軟*」「おっとり」「理想を重視する」
呉西	「商売上手*」「けち*」		「こつこつ稼ぐ*」「がんこ*」「せっかち*」「消極的」

*を付した項目は、全体集計でも統計的に有意な差が表れた項目

5-7 進学・就職先における東西の差

富山県から東京・大阪・名古屋の三大都市圏への鉄道の所要時間は、どこへも同程度かかる。富山駅から、東京駅へは特急と新幹線を乗り継いで約3時間11分（約400km）、大阪駅へは特急一本で約3時間18分（約330km）、名古屋駅へは特急と新幹線を乗り継いで約3時間13分（約315km）である。富山駅と高岡駅の距離は18.8kmで、普通列車で19分、特急列車で11分かかる。また、飛行機は、富山空港と羽田空港を1日6往復、約1時間で結んでいる。ただし、富山市郊外に位置する富山空港へは、高岡市から1時間程度かかるので、高岡市民にとって、高岡駅からすぐに乗車できる鉄道にくらべ、飛行機の利便性は低い。

問10で、富山県以外で進学・就職したい都道府県をたずねている。この問10は、「すでに進学や就職されている人も、これから進学や就職するつもりで記入してください」と注意書きされており、一種の仮定にもとづく質問である。その回答結果⁶¹を見ると、「富山市民の関東志向、高岡市民の関西志向」の傾向がうかがえる。「東京」と答えた富山市民の割合は、高岡市民の2倍近く多かった（富山45.7%、高岡24.8%）。「京都」または「大阪」と答えた高岡市民の割合の合計は、富山市民の3倍ほど多かった（高岡30.6%、富山10.1%）。それ以外で人気があったのは、富山県の隣の石川県だった（富山14.7%、高岡14.6%）。

「東日本」「西日本」⁶²と再コードして集計しなおすと、「富山市民の東日本志向、高岡市民の西日本志向」が改めて確認できる。これは、統計的に有意な差である⁶³。

61 この設問は、無回答と無効回答（複数の都道府県をあげる、富山県や外国をあげる）が多かった。全446ケースのうち、無回答は146ケース（32.7%）、無効回答は34ケース（7.6%）あった。

62 新潟県・長野県・静岡県以東を「東日本」、富山県・岐阜県・愛知県以西を「西日本」とした。ただし、富山県という回答は、欠損値として除いた。

63 $\chi^2 = 10.926, df = 1, p < .005$

表20 現在の居住地域別の「年齢」と「進学・就職したい地域ブロック」

		東日本	西日本	回答者計
富山市	20～39歳	62.2%	37.8%	37人
	40～59歳	63.2%	36.8%	57人
	60～79歳	54.5%	45.5%	33人
	合計	60.6%	39.4%	127人
高岡市	20～39歳	41.7%	58.3%	36人
	40～59歳	44.4%	55.6%	54人
	60～79歳	28.9%	71.1%	45人
	合計	38.5%	61.5%	135人

「性別」で、進学・就職先の東日本・西日本志向を見ると、両市とも、男性のほうが東日本志向である傾向が見られ、富山市では、統計的な有意差があった⁶⁴。特に、東京都をあげた人の割合は、富山市では、男女差が特に大きかった（男54.5%、女36.7%）が、高岡市では差がなかった（男24.6%、女26.0%）。

「最後に卒業した学校」（問25）で、中学校・高等学校・専門学校を「中等教育」、短期大学・大学・大学院を「高等教育」と再コードしたとき、両市とも、高等教育を受けた人のほうが東日本志向である傾向が見られ、富山市では、統計的な有意差があった⁶⁵。東京都にかぎっても、両市で、高等教育を受けた人のほうが、東京志向が強かった。特に、富山市では、高等教育を受けた人の実に60.3%が、東京都と回答している。

20歳ごとの「年齢」（3区分）では、両市ともに、60～79歳は西日本志向が強いものの、20～59歳では東日本志向が強くなっている（表20）。しかし、両市とも、20～39歳と40～59歳の差はほとんどない。ただし、東京都を見ると、若い年齢層ほど東京をあげる割合が高い（富山市54.1%→45.6%→39.4%、高岡市33.3%→27.8%→15.6%）。「富山市民の東日本志向、高岡市民の西日本志向」は残存しているものの、富山県全体としては、東日本志向（東京志向）が強まっているように見える。これには、鉄道整備にともなう富山・東京間の所要時間短縮も一役買っているだろう（表21）。

64 富山市 $\chi^2 = 5.094, df=1, p<.05$

65 富山市 $\chi^2 = 7.514, df=1, p<.01$

富山から東京へ向かう鉄道の所要時間は、1982年に上越新幹線が大宮まで開業する前は、いったん富山から米原へ特急で出て、そこから東海道新幹線で東京に向かうのが、最速ルートだった。当時、6時間近くかかった。また、富山と上野を長野経由で結ぶ直通の特急も走っており、東海道新幹線よりも運賃が割安だが、6時間あまりかかるルートもあった。上越新幹線が開業し、さらに1985年に大宮・上野間も開業すると、富山から長岡へ特急で行き、そこから上越新幹線で上野に向かうのが、最速ルートとなった。所要時間は、4時間あまりである。さらに、1997年に、ほくほく線が開業してからは、越後湯沢まで特急で行き、そこから上越新幹線に乗ると、富山駅を出発して最速で3時間10分ほどで東京駅に到着するようになった。現在も、これが最速ルートである。2014年の開業を目指して、長野・金沢間の北陸新幹線が建設中である。これが完成すると、富山と東京は、2時間あまりで結ばれる。そうになると、三大都市圏のうち、東京が、鉄道の所要時間のもっともかからない都市になる。今後、ますます、富山県の東京志向が強まることが予測される。また、こうした鉄道所要時間の歴史の変遷を見ると、世代ごとに東西の感覚が異なることにも、うなずける。

表21 富山駅から三大都市への鉄道の所要時間の変遷⁶⁶

年	東京	名古屋	大阪	備考
1961年	7時間21分	4時間36分	5時間07分	
1969年	6時間15分	3時間44分	4時間20分	1964年東海道新幹線開業
1981年	5時間54分	3時間44分	4時間00分	1975年湖西線開通
1983年	4時間46分	3時間43分	3時間58分	1982年上越新幹線開業
1986年	4時間08分	3時間47分	3時間43分	1985年上越新幹線上野乗入
1997年	3時間09分	3時間29分	3時間10分	1997年ほくほく線開業
2006年	3時間11分	3時間13分	3時間18分	

66 目安を得るために、過去の時刻表を調べた。最短の所要時間とはかぎらない。

5-8 北陸新幹線駅設置における東西の差

北陸新幹線の開業は、今後、富山県の東西意識に影響すると思われる。問15では、「北陸新幹線の駅設置の必要性」をたずねた。北陸新幹線の開業は、沿線地域に大きな経済効果をもたらすと言われている。1998年3月の北陸新幹線建設促進同盟会調査は、長野・福井間の新幹線整備によって、建設から開業7年間で、総生産が約3兆円増加すると予測している（北陸新幹線建設促進同盟会 2006）。その一方で、1兆5千億円を超える長野・白山総合車両基地間の建設費（福井県新幹線建設推進課 2006）⁶⁷の3分の1を沿線自治体が負担しなければならないことや、新幹線に平行して走る在来線のJRからの経営分離、近隣の大都市に人や企業を吸い上げられて空洞化する「ストロー現象」などの負の側面もある。新幹線開業には光と陰の両面があるが、いずれにせよ、沿線住民に大きな影響をあたえることは確かである。

富山県内には、黒部市・富山市・高岡市の3カ所に、新幹線駅の設置が予定されている。富山市に置かれる新幹線駅は、現在の富山駅と同じだが、黒部市と高岡市では、それぞれ市の郊外に新しい駅が設置される予定である。新高岡駅（仮称）の設置予定の場所は、JR高岡駅から南へ約1.5kmのJR城端線と交差する地点付近であり、北陸新幹線の隣接駅である富山駅とは約19km、金沢駅とは約40km離れている。新黒部駅（仮称）の設置予定場所は、JR黒部駅から東へ約4.5kmの富山地方鉄道本線と交差する地点付近であり、新幹線隣接駅の富山駅とは約34km、糸魚川駅とは約40km離れている。現在、駅舎や駅周辺部の開発について、計画が検討されているところである。

問15の回答結果を見ると、「富山駅→新高岡駅→新黒部駅」の順で必要性が高いと判断されている。特に、富山駅については、両市の9割以上の人が必要性を認

⁶⁷ 北陸新幹線の高崎・長野間約117kmの建設費は約8300億円であり、1kmあたり約70億円の建設費がかかった（国土交通省 2002）。長野・白山総合車両基地間は約238kmであるので、これにもとづいて建設費を概算すると、1兆6883億円となる。

めている。しかし、富山駅を必要だと回答した人の割合は、富山市民よりも、高岡市民のほうが、統計的に有意に高かった⁶⁸。富山市とくらべて経済的地位が相対的に低下し、人口も減少している高岡市に住んでいると、新幹線の必要性がより切実に感じられるのかもしれない。次に、新高岡駅については、全体で6割強の人が必要性を認めている。富山市と高岡市間に統計的に有意な差⁶⁹があり、高岡市民の76.9%が、新高岡駅を必要だと答えたのに対し、富山市民は、必要48.7%、不要28.0%と対照的な回答をしている。最後に、新黒部駅については、全体の4割弱の人が必要だと答えるにとどまった。両市間に統計的に有意な差はなかった。また、「わからない」と回答した人が3割あまりいたのも、新黒部駅の特徴である(表22)。

表22 現在の居住地域別の「新幹線駅の必要性（黒部）（富山）（高岡）」

		必要だ	必要ない	わからない	回答者計
新黒部駅	富山市	35.6%	34.5%	29.9%	194人
	高岡市	40.3%	27.4%	32.3%	201人
	合計	38.0%	30.9%	31.1%	395人
富山駅	富山市	90.2%	7.4%	2.5%	204人
	高岡市	92.7%	2.4%	4.9%	205人
	合計	91.4%	4.9%	3.7%	409人
新高岡駅	富山市	48.7%	28.0%	23.3%	193人
	高岡市	76.9%	10.7%	12.4%	225人
	合計	63.9%	18.7%	17.5%	418人

「居住期間」（4区分）との関連を見ると、どの駅についても、居住期間が「10年～20年未満」の層が「必要ない」と答える割合が高かった。一般に、居住期間が短い人ほど「必要ない」と答える割合が増えるが、「10年未満」で反転して「必要だ」とする人が増える。居住期間「10年未満」の人が、新幹線駅を「必要だ」と回答するのは、転勤の多い仕事に就いている人が多いためかもしれない。

68 $\chi^2 = 6.761, df=2, p<.05$

69 $\chi^2 = 36.637, df=2, p<.0005$

「年齢」（3段階）との関連を見ると、年齢が若い世代ほど、「必要ない」と答える傾向が若干見られる。ただし、新黒部駅に対する高岡市民の回答には、統計的な有意差が認められたものの⁷⁰、富山駅と新高岡駅には、統計的な有意差はなかった（表23）。

表23 現在の居住地域別の「年齢」と「新幹線駅の必要性（黒部）（富山）（高岡）」

			必要だ	必要ない	わからない	回答者計
新黒部駅	富山市	20～39歳	31.1%	35.6%	33.3%	45人
		40～59歳	33.7%	33.7%	32.6%	89人
		60～79歳	42.4%	35.6%	22.0%	59人
		合計	35.8%	34.7%	29.5%	193人
	高岡市	20～39歳	28.6%	35.7%	35.7%	42人
		40～59歳	33.3%	29.3%	37.3%	75人
		60～79歳	55.0%	21.3%	23.8%	83人
		合計	41.1%	27.4%	31.5%	201人
富山駅	富山市	20～39歳	93.5%	4.3%	2.2%	46人
		40～59歳	91.2%	6.6%	2.2%	91人
		60～79歳	87.7%	9.2%	3.1%	65人
		合計	90.6%	6.9%	2.5%	202人
	高岡市	20～39歳	97.6%	.0%	2.4%	42人
		40～59歳	86.8%	3.9%	9.2%	76人
		60～79歳	96.4%	2.4%	1.2%	83人
		合計	93.0%	2.5%	4.5%	201人
新高岡駅	富山市	20～39歳	48.9%	35.6%	15.6%	45人
		40～59歳	47.2%	25.8%	27.0%	89人
		60～79歳	51.7%	25.9%	22.4%	58人
		合計	49.0%	28.1%	22.9%	192人
	高岡市	20～39歳	76.2%	14.3%	9.5%	42人
		40～59歳	70.4%	11.1%	18.5%	81人
		60～79歳	82.7%	8.2%	9.2%	98人
		合計	76.9%	10.4%	12.7%	221人

6 おわりに

本稿の目的は、交通通信の発達によって富山県の一体化が指摘されるなか、

70 高岡市 $\chi^2 = 11.303, df=4, p < .05$

従来から言われている富山県の東西の違いについて、富山市と高岡市で実施したサーベイ調査の結果から具体的に明らかにすることであった。得られた知見は、以下のとおりである。

居住地域との関係では、富山市民と高岡市民のいずれも、強いかわりをもっている。8割以上の人びとが自分の居住地域に愛着をもっており、8割以上の人びとが「地域社会は自分の生活上のよりどころであるから、少々負担になっても、お互いに協力し、住みやすくなるよう心がけたい」という意見に賛成だった。地域活動への参加頻度は、高岡市民のほうが高い。人びとの行動範囲については、日常的には自分の居住地域の近辺ですごしているが、数ヶ月に1回は富山県外にも遠出をしており、また、富山県の東西をまたいで地理的に幅広く交友している人もいた。富山県内のニュースには、テレビや新聞をとおして日常的に接している。

富山県を東と西に二分する呉東と呉西という区別の認知は、いずれの市でも9割を超え、全体で94.8%だった。居住期間が10年未満の人でも、8割以上がこの区別を知っている。そして、回答者の約4分の3が、呉東と呉西に何らかの違いがあると考えている。高岡市では、いずれの年齢層でも7割以上の人が、呉東と呉西の違いがあると回答したが、富山市では、年齢の若い人ほど違いがあると回答する傾向が見られた。「食事」「言葉づかい」「年中行事」「人柄」について呉東と呉西の違いをたずねると、言葉づかいがもっとも違いを感じる項目であり、「年中行事→人柄→食事」の順に違いを感じている。

食事の東西差において、高岡市民のほうが、年取り魚としてブリを食べる傾向が若干見られたが、統計的には有意ではない。肉じゃがの肉も、両市に差はなかった。うどんのつゆは、富山市では、関東風の醤油ベースと関西風のだしベースのつゆが半々だったが、高岡市では、約8割が関西風のつゆであり、両市に統計的に有意な差が見られた。

言葉の東西差において、過剰な塩味については、富山市民の4割が「ショウカライ」、高岡市民の4割強が「クドイ」と表現するという統計的に有意な差

が見られた。ブリの若魚を指す「ガンド」の使用率は、富山市32.7%、高岡市59.6%で、統計的に有意な差があった。語尾の「ちゃ」は、両市で広くもちいられている。

人柄では、高岡市民のほうが、呉東と呉西を区別する傾向が見られた。両市民ともに、呉東の人より呉西の人を「商売上手」「けち」と評している。高岡市民は、呉西の人より呉東の人を「積極的」「柔軟」「おっとり」「理想を重視する」と評し、呉東の人より呉西の人を「こつこつ稼ぐ」「がんこ」「せっかち」「消極的」と評する。富山市民は、呉西の人より呉東の人を「消極的」と評している。両市民とも、自分たちのほうが「消極的」と評している点も興味深い。

進学・就職先では、富山市民の東日本志向（関東志向）、高岡市民の西日本志向（関西志向）が見られた。ただし、両市ともに若い年齢層ほど「東京」という回答が多く、富山県全体では東京志向が強まっているように見える。

新幹線駅設置については、「富山駅→新高岡駅→新黒部駅」の順で必要性が高いと判断されている。全体の9割以上の方が必要性を認めている富山駅は、高岡市民のほうがより必要だと回答している。新高岡駅についても、高岡市民のほうが必要だと回答している。

本稿では、調査結果から具体的な富山県の東西差を記述することに主眼をおいた。次の関心は、なぜそのような東西差がもたらされたのか（あるいは、残存しているのか）を解き明かすことである。そのためには、今回のような共時的で量的なサーベイ調査よりも、質的な資料にもとづく歴史的な調査が必要となる。この点を今後の課題としたい。

参考文献

- 石崎久蔵, 2006, 「福光のチャチャ弁」 シニアねつと隊 『福光ものしり事典』
(<http://monoshiri.e-fuku3.com/java/tale/detail.jsp?clientid=000262&id=000061>, 2006.9.18)
- 市川健夫, 1999, 「食文化にみる地域性」 芳賀昇・石川寛子監修 『全集 日本の食文化 第十二巻——郷土と行事の食』 雄山閣出版, 17-43.
- 市川健夫, 2002, 「信州の鰯街道と鰯文化」 松本市立博物館編 『鰯のきた道——越中・飛騨・信州へと続く街道』 オフィスエム, 6-17.
- 稲村修, 2002, 「鰯[ブリ]という魚の不思議」 松本市立博物館編 『鰯のきた道——越中・飛騨・信州へと続く街道』 オフィスエム, 51-3.
- ウィキペディア, 2006, 「うどん」
(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%86%E3%81%A9%E3%82%93>, 2006.9.17)
- 川本栄一郎, 1989, 「富山県における『ぶり』の成長段階名の分布と変遷」 『富山大学人文学部紀要』14: 19-33.
- 北日本新聞社, 2005, 「会社概要」
(<http://www.kitanippon.co.jp/kns/company/company.html>, 2006.9.17)
- 国土交通省, 2002, 「新幹線鉄道の整備——整備新幹線Q&A」
(http://www.mlit.go.jp/tetudo/shinkansen/shinkansen6_QandA.html, 2006.12.7)
- 小西いずみ, 2004, 「富山県方言の文法——地理的分布と記述研究の視点から」 真田信治監修・中井精一・内山純蔵・高橋浩二編 『日本海沿岸の地域特性とことば——富山県方言の過去・現在・未来』 桂書房, 28-50.
- 佐伯安一, 1998, 「海と山の食文化——富山県の食習俗について」 陳舜臣他 『味噌・醤油・酒の来た道』 小学館 (小学館ライブラリー), 191-210.
- 真田信治, 2002, 『方言の日本地図——ことばの旅』 講談社 (講談社+α新書).
- 真田信治, 2004, 「富山県方言の過去・現在・未来」 真田信治監修・中井精一・内山純蔵・高橋浩二編 『日本海沿岸の地域特性とことば——富山県方言の過去・現在・未来』 桂書房, 1-9.
- 塩田雄大, 2003, 「食関連用語をめぐる意味の「ゆれ」——「肉」は何の肉か——平成15年度「ことばのゆれ」全国調査から②」 『放送研究と調査』53(11): 66-83.
- 司馬遼太郎, 1978, 『郡上・白川街道, 堺・紀州街道ほか——街道をゆく4』 朝日新聞社 (朝日文庫).
- 須山盛彰, 1994, 「呉東吳西」 富山大百科事典編集事務局編 『富山大百科事典』 北日本新聞社, 上巻674.
- 須山盛彰編, 1997, 『富山県 (ビジュアル版につぼん再発見16)』 同朋社.
- 須山盛彰, 2002, 「富山県における市・町村合併の経緯と問題点——平成の合併はどうあるべきか」 『自然と社会』 富山地学会・石川地理学会・福井地学会 68: 1-9.
- 総務省統計局, 2002, 『富山県の人口——平成12年国勢調査 編集・解説シリーズNo.2 都道府県の人口 その16』
- 総務省統計局, 2006, 「全国消費実態調査」 (<http://www.stat.go.jp/data/zensho/index.htm>, 2006.11.23)
- 富山県, 1983, 『富山県史——通史編VII現代』 .
- 富山高岡広域都市圏総合都市交通体系調査会, 2002, 『富山高岡広域都市圏第3回パーソントリップ調査報告書 (総集編)』
- 中井精一, 2004, 「語彙分布からみた富山県方言の地域差とその背景」 真田信治監修・中井精一・内山純蔵・高橋浩二編 『日本海沿岸の地域特性とことば——富山県方言の過去・現在・未来』 桂書房, 51-71.
- 中井精一・坂口直樹, 2001, 『富山県言語動態地図』 富山大学人文学部日本語学研究室.
- 中井精一・小山拓郎編, 2004, 『富山県方言の総合的研究——計量的調査研究』 富山大学人文学部日本語学研究室.

- 平山輝男編, 1998, 『富山県のことば (日本のことばシリーズ16)』 明治書院.
- 広瀬誠, 1976, 「呉東呉西」 富山新聞社大百科事典編集部 『富山県大百科事典』 富山新聞社, 310.
- 福井県新幹線建設推進課, 2006, 「北陸新幹線について／ルート図」
(<http://info.pref.fukui.jp/sokou/shinkansen/3-1.html>, 2006.12.7)
- 北陸新幹線建設促進同盟会, 2006, 「未来を拓く北陸新幹線」
(<http://www.h-shinkansen.gr.jp/index.html>, 2006.12.7)
- 本間伸夫, 1999, 「東西食文化の日本海側の接点に関する研究——幾つかの『食』についての接点の位置について」 芳賀昇・石川寛子監修 『全集 日本の食文化 第十二巻——郷土と行事の食』 雄山閣出版, 45-74.
- 前垣和義, 2002, 『どっちがうまい!? 東京と大阪・「味」のなるほど比較事典——味の好み・料理法・食べ方からネーミングの違いまで』 PHP研究所 (PHP文庫).
- 読売新聞, 2005, 「新日本語の現場——方言の今 (1)」 『読売新聞』 (2005年11月9日朝刊)

謝辞

年末年始のお忙しいなか、貴重な時間を割いて質問紙に回答してくださった富山市と高岡市の皆様に深く感謝いたします。標本抽出作業で便宜をはかってくださった富山市選挙管理委員会および高岡市選挙管理委員会に感謝いたします。企画から実査にいたるまで一緒に調査にかかわってくれた富山大学経済学部4年生の酒向博行君と塚原和久君に感謝いたします。

提出年月日：2006年12月11日